医学雑誌総合目録和文編第5版の編集を終えて

菅 利 信*

はじめに

日本医学図書館協会より今度医学雑誌総合目録和文編第5版(以下和文編第5版と略す)が刊行された。和文編第5版が刊行される迄の小史を述べてみると、日本医学図書館協会の前身である医科大学附属図書館協議会より医科大学共同学術雑誌目録(収録機関数8, 収録雑誌数658)が昭和6年に、つづいて第2版(収録機関数10, 収録雑誌数850)が昭和10年に、第3版(収録機関数15, 収録雑誌数937)が昭和17年に刊行され、第4版より欧文編、和文編に分冊された。医学雑誌総合目録和文編第4版(収録機関数50, 収録雑誌数2,421)は昭和38年刊行された。今度刊行された和文編第5版(収録機関数67, 収録雑誌数3,717)は昭和44年に刊行された医学雑誌総合目録欧文編第5版と同様の編集方針がとられ刊行された。ここに名実共に医学雑誌総合目録第5版が完成したその背景には一貫して相互協力の体制の維持に務めた日本医学図書館協会の方針が反映している。

編集経過

医学雑誌総合目録欧文編第5版が昭和44年に刊行され利用されているが、和文編のみ第5版が未刊行であった。

当時各加盟館が利用している医学雑誌総合目録和文編第4版はすでに刊行されてから8年も経過し最新の情報提供には現行医学雑誌所在目録を併用しなければ不可能な現状であった。たまたま昭和45年5月関東地区医学図書館協議会の席上慶応義塾大学より日本医学図書館協会第41回総会議題として関東区より「医学雑誌総合目録和文編第5版の編集について」を提出したい旨提案が

あり承認された。その後6月22日日本医学図書館協会事務局長(裏田)、総合目録担当館(慶大津田)より関東区各加盟館宛に「医学雑誌総合目録和文編(第5版)編集準備委員会の発足について」の通達がありここに始めて編集準備委員会が発足した。この編集準備委員会は、日本医学図書館協会第40回総会(和歌山)で決定された目録機械化小委員会(仮称)を兼ねるとのことであった。当時編集準備委員会のメンバーは次の通りであった。

顧問 裏田(事務局長) 津田(理事慶大)

委員 高橋(東大) 磯部(慈恵) 板橋(昭和)

大井(東女) 関口、天野、裏田(慶大) 菅(東医)

編集準備委員会で審議された項目は、対称、収録館、対象主題、収録範囲、書誌的記述、編集スケジュール、編集委員会の運営、原稿形式、アンケート、集稿場所、編集協力委員、マスターカード、出版担当理事との接触等であった。その後日本医学図書館協会第41回総会(横浜)で関東区より総会議題として提案され可決された。

総会終了後編集準備委員会は、編集委員会に移行された。その間、裏田、津田両顧問は辞任され和文編第5版の編集には顧問は置かないことに編集委員会で決定された。

編集準備委員会より編集委員会に移行する間、天野、菅両編集準備委員は、医学雑誌総合目録欧文編第5版の担当地区であった大阪区を訪れ編集当時の状況および編集準備委員より依頼された質問を持って打合せした。

第41回総会終了後編集委員のメンバーは、関口、天野、裏田、松村(慶大) 磯部(慈恵) 板橋(昭和) 高橋(東大) 大井(東女) 本田(国がん) 菅(東医)以上10名の編集委員と編集委員館より協力員が1名ずつ計6名

* Toshinobu SUGA, 東京医科大学

参加した。

編集委員会が編集業務に入る前即ち昭和 45 年 10 月から翌年 3 月迄アルバイト 1 名を採用してマスターカード作製のため医学雑誌総合目録と文編第 4 版、自然科学雑誌総覧および現行医学雑誌所在目録の切抜きを行なった。

編集委員会は昭和 45 年 10 月から昭和 47 年 5 月迄 13 回開催され編集委員会が開催されていない時は、編集のために事務局に来局していた各委員が常に話合う機会を持った。第 1 回の編集委員会で決定した「原稿作成および提出について」(協第 7018 号)は日本医学図書館協会事務局より昭和 45 年 10 月 10 日付で各加盟館宛(第 41 回総会終了時現在)に送附された。アンケート用切は昭和 45 年 11 月 30 日、原稿カード用切は昭和 46 年 1 月 31 日(内容は昭和 45 年 12 月 31 日現在)であった。アンケートについては、回答館は 68 館中 38 館回収率は 55.8%で項目は下記の通りであった。

1. 所蔵館の表示について
 - イ) 日本語の略名 8
 - ロ) ローマ字 1
 - ハ) 第 4 版のように 1
2. 排列について
 - ア. 雑誌名
 - イ) ヘボン式 8
 - バ. 所蔵館
 - イ) ブロック毎排列 1
 - ロ) 現行医学雑誌所在目録と同一に 1
3. 年代表示について
 - イ) 天皇暦 2
 - ロ) 西 暦 1
4. 印刷について
 - イ) 第 4 版より小さく 1
 - ロ) 明朝体はみにくい 1
5. 製本について
 - イ) 欧文編より丈夫に 1
 - ロ) 欧文編の製本は不良 多数

以上であった。

原稿提出カード用切は昭和 46 年 1 月 31 日なるも用切日迄到着したのは正会員 51 館中、21 館、準会員 13 館中 9 館であり準会員の中に一館のみ不参加の館があり協会の事業に参加が実現出来なかったことは誠に残念であった。尚原稿カードの最終到着は 3 月 20 日であった。原稿提出カード枚数 53,153 枚(正会員 49,882 枚、準会員

3,271 枚)であり、正会員中最高提出枚数は 1,851 枚、最低 314 枚、準会員中最高提出枚数 928 枚、最低 73 枚であった。

昭和 46 年 3 月末より印刷原稿カード作製のため編集委員に区分配分を行ない各館に持ち帰り、カード作製に取りかかった。しかし各館の提出カードの不統一のため予想外にカード作製が遅くなり最初の印刷原稿カードを印刷にまわしたのは 10 月末で最後は 47 年 1 月中旬であった。その他華韓文のカードは 3 月末印刷へと最初の目標である 1 カ年で完成という試みは大きくくずれてしまった。その間初校、再校、三校、四校と校正に追われ通しであり気がついたらもう 47 年 6 月という状況であった。その間第 42 回総会(三重)では見本刷を配布したりしたが内容はなかなか苦しいの一言であった。

今後の問題点

和文編第 5 版を医学雑誌総合目録欧文編第 5 版に準拠したが今後の問題点としては、

1) 逐次刊行物記入の標準化

和文編第 5 版では各館の現行記入方式通りで集稿したが提出カードを早く集める点はいいが原稿カード作製に非常に時間がかかり経済的にみて非常にロスが大きく目立った。協会としては、すぐ委員会を設置してこの問題を調査し実行にうつすべきである。

2) 機械化の準備委員会を

一部加盟館の犠牲のうえに成立つ事業はこれが最後であろう。第 6 版以降の刊行に備え可及的速かに準備委員会を設置することである。

3) 学会、廃刊誌の書誌的データーの作製

機械化に移行する前に、学会誌、休刊(廃刊誌)等の書誌的データーを完成すること。改版毎に調査を繰返すのは非効率である。

4) 和文編の複雑性

誌名の表現方法、漢字とかな文字の組合せ、かな文字のみ、ローマ字翻字、かな文字、ローマ字のわかち書き等は 1) に準じて委員会設置のこと。また、国内雑誌の和名と欧名、欧名の二重表現、誌名のみ欧文の和文誌等も上記に準ずる。

5) 総合目録の改版

総合目録第 6 版は遅くとも 3 年以内に刊行すべきなので本年度総会(43 回大阪市大)で委員会を設置してすぐに機械化に取りくんで貰いたい。

(昭和 47 年 7 月 17 日受付)

医学雑誌総合目録和文編第5版の編集について

——作業の経過並びに問題点——

関 口 昌 樹*

はじめに

医学雑誌総合目録和文編第5版（以下新版と略）の編集経過報告の中、具体的事項の執筆を命ぜられたが、説明の都合上、菅委員長（総括報告）と多くの点で重複せざるを得なかった。また欧文編の編集経過報告（本誌16巻4号）を随時参照引用させて頂いたが、同報告は座談会の速記要旨で、背景の事情についての説明や具体例は殆んど省かれている為、理解不足や誤解が少なくないであろう。これらの点に関し、関係者並びに読者諸賢の御有怨を予めお願いする次第である。

〔A〕 第1期 作業開始より印刷原稿作成開始直前まで（昭45.10～昭46.3）

本作業は昭和45年10月、第41回総会の決議に基づき関東区に設けられた編集委員会の第1回会合が開かれた同年10月15日を以て正式に開始された。委員長が報告されているように、実際には同年8月、関東区会が新版刊行についての総会議題提出を決定した直後から準備作業が始められていたが、基本方針を公表し、本会の事業として正式に作業を開始したのは、当然のことながら編集委員会の発足直後であった。而してこの時期から翌年3月末までは、本作業の中心と言うべき印刷原稿作成の為の準備段階であった。この時期に行なわれた作業のうち主なものは次の通りである。

1. 編集委員会 人事、事務室、執務規程等の決定
2. 編集計画 基本方針並びに具体的事項の決定
3. アンケート 発送及び回答内容の集計、分析
4. 各館提出原稿作成要項の決定と、これによる原稿提出の依頼

5. 誌名マスターカード 作製（東医）、点検（慶応）、改訂（6館にて分担）
6. 印刷原稿記入要項の作成
7. 提出原稿の集計と仕分け
8. 印刷原稿作製作業の分担

以上の中から、本作業に全般的影響を与える問題点を蔵していると思われる項目を選び、欧文編編集経過報告との対比を交えつつ報告することとする。

1. 編集計画

総会に於て菅委員長（当時は準備委員長）が明らかにした通り、基本的事項は総て欧文編に従うことは最初から自明のこととして決定され、各委員の間でも何等異論はなかった。新版が欧文編の姉妹編である以上、主要な点では総て先に出された欧文編に一致させるべきは当然のことと言えるであろう。然し後章に於て述べる如く、邦文誌には欧文誌（特に欧文編の大部分を占める外国雑誌）には見られない特殊な性格（日本語と外国語の相違、わが国の学会や出版界の独特の生態、慣行等）に由来すると思われる形態があり、このような点は欧文編に従って記入したのではどうにも適当に表現出来ず、強いて欧文編に従った場合、利用上支障を来すことも予想される。そこでこのような場合に限り、和文編第4版（以下旧版と略）の方式を尊重することが基本方針として認められた。然しその結果、欧文編方式の部分と旧版方式の部分とが恰も木に竹をついだような状態で併記される例が若干生ずるに至ったのは、已むを得ない結果とはいえ甚だ遺憾であり、今後の課題として検討されるよう切望する。（上記の例としては、欧文誌と内容が邦文で誌名のみ外国語のものとは隣り合って記載されている場合が挙げられよう。例……Medical Ultrasonics と Medical View）

* Masaki SEKIGUCHI, 慶応義塾大学医学情報センター

次に具体的事項の中では、収録範囲が最も多くの難題を提出した。これは恐らく欧文編でも同様の経験をされたことと思われるが、医学と種々な程度で関係を持つ所謂関連領域に於て特に甚だしかった。編集計画を成文化する際は「自然科学及び技術関係のものは内容が専門的であれば出来るだけ収録。その他はケースバイケース」などと一応辻褄を合わせたものの、いざ個々の雑誌について採否を決めるとなると、議論百出して容易に決定を見ない状態が繰返された。

然しこれ以上に各委員を苦しめたのは内容の程度の問題であった。これについて編集計画の条文では、「学術的又は専門的な記事を殆んど或いは全く含まぬものは原則として除外する」と規定し、その例として①医師会、薬剤師会等の会報②学生自治会、療養所患者慰安会等の機関誌③製薬会社の娯楽的 PR 誌④家庭医学、民間療法⑤学位論文要旨⑥1 機関又は 1 教室の業績目録⑦各機関の要覧、業務報告等々かなり詳細に列举し、これなら先ず大丈夫と思ったのも束の間、忽ち各委員からどうするどうするが殺到し、お互いに顔を見合せ出るものは溜息許りという始末になった。その主な原因は「学術的又は専門的」の判定が困難であると共に、「殆んど或いは全く含まぬ」かどうかは所蔵館に照会しなければ（時には照会しても）分らぬ所にあった。この為委員会に於て甲論乙駁の末、結局上記の専門性に乏しいものを除外する決定は御破算となり、医学分野に属するものは出来るだけ収録するというふうに 180 度の転回を見るに至った。（医文学、医学と福音等は最初除外されていたが、方針変更のお蔭で収録と決定、急遽原稿を作成追加した組である。）

2. 各館提出原稿作成要項

各館に原稿提出を依頼する際、原稿の記述形式をどのように決めて依頼するかは、新版の内容を左右し本作業の成否を決する基本的な問題だけに、この取扱いは各委員共に頗る苦慮した。既に準備委員会時代から議題として取上げ検討を重ねては来たものの、いざ本番となり各館に依頼状を出す段階に入っても、事の余りな重大さに容易に結論は出せなかった。然し時間は刻々と過ぎて行く。46 年秋の総会までに一応のメドをつけるという目標から逆算して時間表を作ってみると、一刻も早く依頼状を出さねばならぬ。こうして 10 月 15 日に開かれた第 1 回編集委員会に於て、第 1 議題「各加盟館に送附する原稿依頼状について」の基本方針として、「各館に於て現在用いられている記述方法により記入する」ことを

決定したのである。

筆者の記憶する限りでは、この委員会が開かれた頃は、欧文編の編集に当られた方々の座談会記録を掲載した本誌 16 巻 4 号は配布されて居らず、従って各委員はその内容を知らなかったと思う。この座談会では、本会に於て目録規則を統一し、各館はこれに則って総合目録の原稿を作製する必要を全出席者が斉しく認め、更に目録の標準化が総合目録の編集作業に重大な影響を与えることを強調している。数々の労苦と経験から生み出されたこの貴重な教訓を、和文編編集作業の第一歩とも言うべき原稿作成要項の決定に際し何等活用し得なかったことは誠に遺憾であり、欧文編編集委員の方々に申訳ない次第であるが、今日顧ると当時の状況では、たとえ座談会記事を各委員が読んでいたとしても、結果的には同じではなかったかと思われてならない。何となれば当時は下記の如き情勢であったからである。

1. 理想的に言えば、医学雑誌の特性によく適合した独自の雑誌目録規則を、本邦唯一の専門団体である本会の手で作成し、加盟館の日常業務の改善に資すると共に、共同作業の質並びに能率向上を図るべきであろう。然し今回の新版編集に際し、これが時間的に全く不可能なことは誰の目にも明らかであった。

2. 1 が不可能な場合、現行の目録規則中和文雑誌の処理（受入—製本—利用を通じて）に最も適して居り、且つ一般によく知られ広く用いられているもの（洋書に於ける英米目録規則の如く）を探し出してこれに準拠する方法が考えられるであろう。然しこのような既製の規則を 100 パーセント採用するか（その場合でも各条文の解釈の問題が残るが）、或いは医学図書館に適するように部分的改変を加えるかの検討が必要となるが、今回はその時間的余裕すらない。

3. 幸いに現行規則の中から、新版原稿作成の為の標準目録規則として適当な（採否の検討に殆んど時間を要しない程の）が見つかったとしても、次に起こるのは加盟各館に対する周知徹底の問題である。改めて言う必要もないが、この規則は、各館が雑誌目録規則を変更される際はこれをお使いになつては如何ですかなどという悠長なお奨めではなく、新版の原稿作成には必ずこの規則を使って下さい（逆に言えばこれ以外の規則を使って記入されては困ります）という殆んど強制的な意味を持つものである。従って各館の担当者がこの規則を十分に理解し、これを使って正確な（新規則の条文を標準として）原稿を作成して呉れないことには、規則を決めた目的は

達成されない。しかも新版編集計画に基づいて原稿提出期限を定め、その厳守を併せて要請する故、各館の担当者に対して、限られた時間内に新規則を完全にマスターし、且つそれによって大量の自館原稿の総てを作成するという二重の負担をかけることになる。若し新規則が自館で現在使用中のものと大した相違がなければまだしも、甚だしく違っている場合、新規則によって全所蔵を記入することはなかなか以て容易な業ではない。各館の目録記入の方式は、特に担当者にとっては長年の馴染みである上、またそれによって現在まで日々の業務を処理して来たものである故、その使用は殆んど習慣的といってもよい状態に達しているのが普通であろう。従って新規則の条文を頭では如何に正確に理解した積りでいても、実際に原稿を書く段になると、つい自館の方式で書いてしまう。原稿提出期間が迫り、急ピッチの作業を余儀なくされる場合など、この危険が特に大きくなることは当然考えられるであろう。

以上述べた所から明らかなように、雑誌総合目録原稿用の標準規則を決める場合は、編集部に於ける内容の検討と各館への周知徹底という両面から、十分な時間的余裕が必要と思われるが、今回はそれが全くなかった。抑々目録規則の統一は、単に総合目録の為のみでなく、本会の各種の共同作業の根拠的要素として、本会内の強固な組織に於て常時慎重な検討を行ない、絶えず改訂を加えて行くべきである。筆者は十数年前、本会執行部の末席を汚していた当時から今日まで、種々な機会にこの点を強調し、本問題の検討をも含めた技術部(仮称)の設置を提案して来たが(第31回総会議事録 p. 32~37(昭35)参照)不幸にして実現を見ぬまま新版編集に従事せねばならなくなった。欧文編の編集委員は次版編集を予定する計画性を指摘されているが、この点全く同感で、次回に備え執行部に於てこの問題を早急に検討されるよう切望して已まない。

3. 誌名マスターカードの事前作成

マスターカードは第2回委員会(昭45.11.19)に於て、(1)新版に於ける各収録誌の誌名を決定すると共に、誌名、出版事項、注記等の典拠を示し、また(2)委員会が決定した収録範囲の実例を示すという両機能をもつことを期待して、各館よりの提出原稿が出揃うまでの期間を利用して作成することに決められた。その具体的な作業について述べると、先ず旧版中よりその全収録誌名を標準大の目録カードに切貼りし、次いで現行医学雑誌所在目録(以下「現行」と略)1970年版より旧版未収録

誌を抽出して前者に繰込み、これに改良へボン式によるローマ字誌名をタイプした。この作業が完了した後、筆者が全カードを点検し、その際見出した問題点を整理した上で委員会に提出した。

これ等の問題点の新版に於ける処理方針については、委員会に於てかなりの時間を費して検討したが、論議沸騰、審議は屢々紛糾した。その中でも何とか委員会決定乃至統一見解にまでこぎつけたものは、後述の印刷原稿記入要項にとり入れられたが、これ等ですら要項の他の部分と同様、実際に印刷原稿作成作業が始まると、実情に合わないものやカバー出来ぬものが続出し、委員長以下一同この処理には頗る苦慮した。

なおここで是非とも触れておかねばならないのは、誌名その他の書誌的事項を決める為に必要な参考資料(以下ツールと略)の問題である。

これは欧文編の編集の際にも重要な議題の一つであったようで、座談会の中でも大きくとり上げられている故、欧文編との比較の意味も含めて検討してみたい。新版編集に際し使用した主なツールは別表の通りであるが、これだけ多数のツールを使わねばならなかったことが新版の一つの特徴と言えるのではなからうか。以下国内雑誌用ツールの特殊性を新版編集との関連の面から述べることにする。

1) 日本にはこの種のツールの編さん技術に於て万人等しく信を置くという程の権威と定評のある機関(米国のLCやNLMの如き)が存在しない為、内容的に似たりよったりと分っている、一応頭数だけは揃えておかないと安心出来ない。

2) これは1)とも関係するが、日本のツールは記載項目や記載された事項の精度が同一ツールの中でさえ一定していないものが多い。従って一つや二つのツールで間に合せるのは甚だ危険な場合があり、どうしても多数のツールを見比べなければならない。

3) 外国の例は審かにしないが、日本のツールでは係引きが非常に多い。たとえばここ数年間に作られた一般的なツールに収録されている医学雑誌を見ると、誌名を始め出版事項や改題その他の注記など総て旧版(医学雑誌総合目録と文雑誌編第4版)の記載を引用している。それも全然チェックせず一言半句も違えぬ盲目的な引用である。従って独自の(係引きでない)記述をしているものを探すとすると、ツールの種類がふえるのは避けられないであろう。

4) 新版では、全収録誌について誌名、出版地の他に

発行所を記載している。(但し主記入のみ) これは編集の基本方針中、上記については旧版にならうとの決定に基づくもので、欧文編との大きな相違点の一つであるが、この 1 項目の追加が作業量並びに労力の面でどれ程の増加をもたらしたかは、経験者のみの知る所であろう。別表の 20 種を越えるツールの中には、発行所の調査の為にのみ使用されたものが幾つもある。また後項 6) の記載とも関係するが、過去のある時点に於ける発行所の正式名称の調査には、別表以外のツールを必要とする場合が屢々あった。

5) 新版では、誌名変更のあった雑誌の取扱い方に画期的な変更が行なわれた。即ち初版以来続けられて来た、各時期の誌名を独立誌扱いとする分割方式を止め、最新誌名統一方式を採用したのである。これは前項 4) と丁度逆で、新版が欧文編と歩調を合せた重要なポイントの一つと言えるであろう。(最新誌名の概念及び記入上の処理方法は欧文編と同一。なお両方式の長短の比較については欧文編の編集経過報告を参照され度い。)

所で各館の原稿を見ると、この改題と巻とに関係する記載が必ずしも一致せず、中には甚だしく食違っている場合も少なくなかった。それ故特に改題注記の記入の正確を期する為に、出来るだけ多くのツールを綿密に比較検討する必要を痛感した。

6) 前項 4) に於て、過去の特定期間点に於ける或る発行所の正確な名称の調査に触れたが、これは発行地についても同様で、且つその調査には前者を凌ぐ困難さを伴う場合も稀ではなかった。たとえば現在ある都市の 1 部となっている地域が過去のある時点ではどういう名称であったかを知る為には、極めて特殊なツール(たとえば地方行政便覧等)によって、各市町村の歴史を調べなければならない場合もある。そこまでしなくてもと言われるかも知れないが、所蔵の最後が明治や大正なのに発行地が北九州市では何とも恰好がつかず、編集に当る者としてこのまま見過す訳には行かなかった。

こんな古い昔でなくても、近頃のように町村合併による新市誕生や、近郊合併による市域拡張が盛に行なわれると、極く最近のことすら正確につかむのは決して容易ではない。継続受入中の雑誌の発行地を布施(現在は東大阪市の 1 部)と記入した原稿が地元の某館から寄せられた例もある。

以上マスターカード作成に不可欠の要具であるツールの問題点を縷述したが、肝心のツールがこのような状態では、折角準備期の段階でマスターカードを作っても、

これが印刷原稿作成の際各収録誌の所蔵記入カードの前につける真の意味の基本カードとしての機能を発揮するよう期待することは到底無理であった。事実、出来上ったマスターカード約 3,500 枚のうち、誌名、出版事項、注記等の各項目が総て記入され、且つ各種のツールを比較検討した結果、絶対確実と太鼓判を押せるものは極めて少なく、また前述の如き種々な問題点で各委員の意見が一致せず、空欄或いは?のついたカードが軒なみに出現した。このような状態で、結局の所、各館の原稿を頼りにマスターカードの記載を片端から訂正補充して行く始末となったが、これでは事前作成の意義は半ば失われたものと認めざるを得ない。本節に於て述べた経過並びに結果は、次節の印刷原稿記入要項と酷似して居り、共に新版編集過程に於ける試行錯誤の顕著な例と言えるであろう。

参 考 資 料

医学関係

- 1) 医科大学共同学術雑誌目録 第 2 版 昭和 10
- 2) 同 上 第 3 版 昭和 17
- 3) 医学雑誌総合目録と文雑誌編 第 4 版 昭和 38
- 4) 同 上 欧文編 第 5 版 昭和 44
- 5) 現行医学雑誌所在目録 1970 年版
- 6) 日本医学雑誌略名表 昭和 35
- 7) 国内医学雑誌逐号刊行年譜 昭和 36
- 8) 日本医歯薬学雑誌総覧 近藤慈恩編 昭和 33
- 9) 医学中央雑誌収載誌目録 昭和 44. 9. 30 現在
- 10) 病院要覧 厚生省医務局総務課
- 11) 東京大学医学図書館受入雑誌リスト [1969 年版]
- 12) 各加盟館所蔵雑誌目録

一般

- 1) 日本自然科学雑誌総覧 昭和 44
- 2) 学術雑誌総合目録 自然科学と文編 昭和 43
- 3) 日本科学技術逐次刊行物目録 昭和 42
- 4) 国立国会図書館和雑誌目録稿 昭和 44
- 5) 国立国会図書館納本週報 逐次刊行物の部
- 6) 全国研究機関要覧 昭和 42
- 7) 全国大学一覧 昭和 45
- 8) 国の刊行物 1971
- 9) 全国大学研究機関誌要覧 昭和 43
- 10) 専門情報機関総覧 1969

4. 印刷原稿記入要項

これまで屢々述べたように、編集作業の基本的方針並

びに処理要項は、印刷原稿作成作業開始まで半年間に、各編集委員が予想される多数の項目について想を練り、略々毎月1回開かれた委員会に私案を持寄り、慎重審議を重ね逐次決定して行った。こうして準備期に於ける委員会の審議の結果を最終的にまとめ上げたのが、「医学雑誌総合目録と文編第5版編集委員会議事録第1回～第5回のまとめ」(昭46.3.31)(以下単に「まとめ」と略)で、その中のD.原稿記入方法が具体的作業の為のマニュアルの中心となるべき部分である。ここで「なるべき」という表現を用いた——用いざるを得なかったという方がより正確であろう——のは、編集委員の中に、このような大量の原稿を相手にした本格的な総合目録の編集作業の経験者が1人も居らず、一方マニュアルはその目的上、作業開始前に出来ていなければならない為、「まとめ」の中特にDの部分は未経験者が集まって作り上げた所謂デスクプランに過ぎず、従って現在各館に於て日常業務の処理に用いているスタッフマニュアルの如く、毎日の作業に於ける基準として必要且十分な事項を網羅し、また各条文が概ね矛盾なく適用し得るとは期待し得べくもなかった。この準備期間中、要項を検討しながら各委員の脳裏を去来したのは、実際に作業が開始された暁には、この要項の条文通りに処理出来ぬものや、完全に予想外の(従って要項のどの項目にも該当しない)問題が必ず起こるであろうが、これ等の問題の処理方針を如何にして決定するか(問題の起こる度に全委員が参集することの不可能なのは明らかである故)、またその決定を全委員並びに協力者に迅速正確に周知徹底するにはどうすればよいかという懸念と不安であった。不幸にしてこの予想は適中し、印刷原稿作成作業が開始されるや否や忽ち難問続出し、委員長は連日各委員の質問攻めに会って席の暖まる邊なく、4月以降の委員会は毎回要項の修正、追加及び解釈の統一に迫われ、また定例参集日(各委員は毎週火、木の何れかの日に努めて編集事務室に集まり、委員長の指示を受け、また相互に連絡を図るよう申合せていた)に偶々全委員の顔が揃うと忽ち臨時の委員会に早変りしたことも幾度もあった。こうして修正に修正を重ね、漸く一応落ち着いた形となったのは既に編集の最終段階に入った頃という、正に「六日の菖蒲」の譬え通りの始末となったのである。前節のマスターカードの項でも触れたが、上記の経過から明らかのように、この印刷原稿記入要項の事前作成も結局は試行錯誤の繰返しであった。

このような一見迂遠なまた無駄骨とも言える方法が、

限られた期間内に編集を完了すべく義務づけられている本作業に於てとられたことについては、貴重な時間を浪費し混乱を大きくしただけではないか、もっと計画性を持って作業が出来なかったかという批判は当然起こるのである。我々としてもこの点を十分反省し、次版の為によりよい方法を提供したいと念願している。然し同時に、このようなコースを辿らざるを得なかった基本的な背景に対する考察も怠ってはならぬであろう。

実を言うと、上記の各項の中で述べたことが基本的背景そのものであり、従ってこれは我々が試行錯誤を繰返したことの弁解に通ずると見られるかも知れない。然し筆者としては徒に弁解に汲々とする積りは毛頭ない。明らかに編集作業の範囲外にあり、しかも編集作業を強力に規制する要素をとり上げ、その実態を客観的に描写し、今後進むべき道を読者諸賢と共に考えてみたかったのである。

〔B〕 第2期 印刷原稿作成より編集作業完了まで(昭46.4～昭47.6)

第1期に於ける準備工作が一段落した頃、未提出であった最後の1館から原稿が到着したので、愈々編集作業の中心をなす印刷原稿作成に着手することとなった。これに先立って、3月下旬に各館提出原稿の第1次仕分けが完了した。この作業は、53,000枚を超える各館の原稿(一つの館の中は誌名のABC順——ヘボン式、訓令式その他とりどりであったが——になっている)を解体し、全体を通して誌名のABC順、一つの雑誌の中は所蔵館の地区別(北から南へ。各地区内の順序は欧文編に準拠)に再編成したもので、要員としてパートタイムの女性1名(現在(財)国際医学情報センター職員)、作業期間は約1ヶ月であった。こうして仕分けの終わった原稿カードを誌名頭字の数組ずつまとめて7グループとし、各委員の分担を決め、これを各自の館に持ち帰って印刷原稿の作成を開始した。この段階に於ける作業は主として編集協力者が担当した。

この段階に於て発生した問題は殆んど無数といってもよく、本稿の中でこれを列挙することは到底不可能であり、また無意味であろうと思われる。何となれば、これ等の問題の大部分は記入の、従って作成要項中の微細な部分の解釈や運用に関する事柄であったからである。(微細だから重要でないなどという積りは毛頭ないが。)仍てここでは前記の「まとめ」の中のD.原稿記入方法の抜萃を掲載し、随所に実例や簡単な説明を加えるに留

め度い。これによって本作業の実態の一端を御想像頂けたならば、誠に幸いである。

なおこの「まとめ」の原文は、第 1 回より第 5 回までの編集委員会の審議の結果を集大成したものであるが、前述の如く、その後夥しい追加、修正が行なわれ、殆んど原意を留めぬ部分すら少なくないが、何分にもこれ等の変更は作業の進行中に臨機応変に行なわれた故、公式記録を作成する余裕がなく（各自のメモを見せ合って確認するのが精一杯であった）、その為修正乃至追加された各項目について、全委員の見解が必ずしも常に一致していたとは言い難い場合もある。従って以下の記述中に、変更される以前のもの或いは最終的決定——これがそのまま新版の最終印刷原稿記入に用いられた方針となった——と異なるものが含まれている可能性は否定できないであろう。また新版の凡例や本稿の既出部分との重複も避けられないが、これ等の点御諒承願いたい。

（1）印刷原稿記入に関する方針並びに規程（「まとめ」D. 原稿記入方法より抜萃）

A. 基本的事項

（1）新版の使命と編集者の心構え

a. 収録された各誌の、新版参加館に於ける所蔵状況を示すことを最大の目的とする。従って単なる雑誌名の一覧、或いはその収録誌についての説明をつけた所謂 directory の類とは根本的に目的を異にするものである。

b. 前項に挙げた目的から明らかな如く、所蔵記入の正確さが新版の生命であることを肝に銘じ、この一点に全力を傾注すべきである。

c. 従って、新版の利用者が求める雑誌並びにその雑誌の各館に於ける所蔵に到達する為に必要な最低限度の書誌的事項以外のもの、特に煩瑣にして無益な故事来歴の穿鑿に心を奪われるが如きは厳に慎しむべきである。

（2）記入上の重要項目

a. 誌名。特に排列に影響を与える語またはその初字の決定

b. 排列

c. 参照及び注記。何れも誌名検索上必要な最小限度にとどめる。

d. 所蔵

e. その他同一誌の分散重出や同名異誌の混同防止に努める。

B. 具体的事項

I. 誌名記入

a. 誌名の決定

1) マスターカードのあるもの。確認済みのものはこれに従う。未確認のものは更に調査する。

2) マスターカードのないもの。極力調査し、どうしても確認し得ない場合は提出原稿の記載に従う。

b. 誌名変更

1) 誌名は参加館に所蔵されている範囲内に於ての最新誌名をとる。

2) 旧版記載のもの。一応確認。確認不能の場合は旧版を尊重する。

3) 旧版以後の変化及び旧版記載中の確実な誤りについては、担当者の責任に於て追加または訂正を行なう。

4) 旧版、マスターカード共に変更の記載がなく、提出原稿にのみ記載されているもの。一応調査し、調査しても分からぬ場合は提出原稿に従う。

c. 日本語の読み方

特に固有名詞の読み方の不明または紛らわしいもの。発行所または原稿提出館に照会。不能の場合は最も常識的な読み方をとる。

※日本 Nippon に統一。Nihon より参照。（但し例外として、日本大学は Nihon とする。）

d. 外来語。全部日本式発音のローマ字綴りにより排列。

例：Vitamin→Bitamin Lepra→Repura

e. 欧文誌名

1) 内容的に欧文、邦文の比重が等しく、両者同格に扱われている雑誌を邦文誌名でとった場合、欧文誌名より参照。

例：Japanese Circulation Journal→日本循環器学誌

2) 逆に欧文誌として欧文編に収録されているものは邦文誌名より欧文編へ参照。

例：日本植物学輯報→欧文編 Japanese Journal of Botany

f. 誌名のとり方が数種考えられるもの。新版に於て採用した誌名に対し、その他の誌名より参照。但しこの参照が→だけで、しかも正式誌名の方に概ね別誌名に関する記載がない為、利用者には→の意味が分らぬ場合も起こり得るのではないと思われる、新版編集上のミスの一つとして反省している。

例：目黒寄生虫館研究報告→Research Bulletin of Meguro Parasitological Museum

g. 副題。誌名決定上または内容を判断する為に絶対必要と思われる場合に限る。

例：Amino Acid and Nucleic Acid～酸酵と代謝～。

MOL (化学技術誌)

なお誌名が外国語の省略形または欧文名の各語のイニシアルのみから成り、且つ現品に於て上記誌名の後に完全誌名が付記されている場合、後者を付記する。

例：MAC; Medical Apparatus Culture

h. 非当用漢字。当用漢字に直す。但し「牀」は現品記載通りとする。

i. 省略誌名。原則として完全誌名の後に附記しない。

j. 前身誌・後継誌。“よりつづく”、“につづく”と記入。これを注記するのは旧版所載または現品に記載あるものに限る。(後に、極めて確実な根拠がある場合も注記する。と追加)

k. 誌名中の片仮名。現品記載通りとする。

例：ノ，ニヨル。（なお漢字「之」もこれに準ずる）

1. 冠称。採用するか否かは旧版または「現行」の記載に従う。

m. ある雑誌が2誌に分離し（分離後の誌名は何れも分離前と別）、且つ両誌共分離前の巻次を継承している場合、3誌を総て独立誌として扱う。

例：皮膚と泌尿——
39巻

西日本皮膚科	40巻	→
西日本泌尿器科	40巻	→

n. 合綴誌が分離した場合。報告して来た館のみ
収録。

例：日本癌学会総会記事 16（昭32）まで 癌の一部として刊行。17 [昭33]（昭34）より分離。（新版に於ける継続受入館は前者 19、後者 55）

○. 官庁，地方自治体等の衛生年報。誌名が単に「衛生年報」だけのものは，発行した官庁や地方自治体の名称を「 」に入れて前につける。

例：〔大阪府〕衛生年報

p. 排列

イ. 邦文誌名は総て改良ヘボン式によりローマ字化し、そのABC順。

ロ. 同一誌名は創刊年の順。

ハ、ローマ字の大文字のみから成る独立誌名は、誌名の首字の属する字部の最初におく。〔例：DE〕

II. 出版事項

a. 非継続所蔵誌（現在刊行中のものを含む）の
発行地，発行所。所蔵記入中の最新巻（号）の刊行され

た時点に於ける名称を記入する。但し問題となるのは、発行地、発行所共に特定年に於ける名称の調査確認の困難なものが多いことで、この対策について種々の検討が行なわれたが、結論を得るに至らなかった。

b. 発行地。東京の区部……東京とのみ記入。市……同名異市の場合を除き市名のみ記入、町村……都道府県名を（ ）に入れて後につける。

c. 発行者 (所)

イ. 株式会社。記入せず。但し日本医学雑誌株式会社は例外として記入する。

ロ. 発行所がある機関または団体の中に置かれている場合、〇〇内という付記は行なわない。この点に関し検討の結果、例外的に付記する場合もあることを認めたが、その条件、記入方法等について決定を見なかった。

d. 編集者(所)。現品に編集者(所)のみ記載され、発行者(所)の記載のない場合……編集者(所)を発行者(所)として扱う。特に(編)等の記入は行わない。

Ⅲ. 所蔵記入

(1) 基本的事項

所蔵している巻号を完全に記入する。従って各館提出原稿中欠号分を報告されたものは、担当者が上記の如く訂正の上印刷原稿に記入すること。

(2) 所蔵館の表示及び排列

a. 表示。漢字の略名を使用する。この略名は「現行」所蔵館一覧所載のものに準拠。

b. 排列。本会地方区別とし北から南の順。同一区内は代表番号順。

(3) Section, 集, 部及びこれに準ずるもの

a. 表示。ローマ数字 (I, II, III...) を用い、
文字 (Sect., 集, 部等) はつけない。

b. 必要により Section 別の誌名カードを作成。

c. Section に分れている雑誌に Section を明示しないて報告されたものは原稿提出館に照会。

d. 誌名中に第〇部会，第〇委員会等とあるものは総て Section として扱う。

(4) 巻、通号併記のもの

雑誌の現品に巻号と通号が併記されて居り、各館の原稿も巻号記入と通号記入とに分れている場合は、担当者の責任に於て何れかに統一する。

(5) 継続 (記号+)

a. 提出原稿中、所蔵記入の最終巻号に継続、所

蔵終結、廃刊等を表わす記号がなく、継続か否か不明の場合は出来るだけ原稿提出館に照会し、それが困難な場合は当該館単独の雑誌目録、「現行」等の資料を参考として処理する。

b. 継続受入誌の最終巻(通号その他も同様)

各館の報告に於ける最終巻がまちまちである場合は、各館の報告中、刊行の日付が昭和45年中の最終である巻に統一して記入する。この決定に対し、非営利出版物(特に官公庁や大学内の部局の刊行物等)で各館の受入状況にも確実を欠く可能性があると思われるものについて、総ての館が最新巻まで受入れていると画一的に決めるのは危険ではないか。特に一方的寄贈の形で送られて来る雑誌の場合、各館原稿に継続受入の記号が付されていても、それは単に、今後も送られて来れば受入れるという程度の意味で、継続記号があるから必ず最新巻まで入っているとは言えないのではないかの意見も出たが、結論を得るに至らず、問題を後日に貽した。

(6) 廃刊(記号//)

廃刊の巻号が確認された場合、各館原稿中にこの巻号があれば、廃刊記号の記載がなくても、担当者に於て一律に//を記入する。

(7) 欠号

a. 欠号表示原稿の書替え。新版では所蔵分のみを記入する故、欠号を表示された原稿は担当者が所蔵分記入の形に直す。(基本的事項参照) 然しこの方針には以下述べる如き重大な問題点があり、原稿作成作業の過程に於てこの方針を適用する際は、特に慎重な検討を要する。

即ち多数の雑誌の中には、ある巻の刊行頻度または最終号の確認が困難なものが少なくない。従って欠号表示で報告されたものを所蔵分記入に直す場合、その巻が何号まで発行されたかが分らぬ為、最終号の記入が出来ない。と言ってこれ等を前後の関係等から軽々しく類推することは多くの場合極めて危険である。たとえば、特に終戦前後に刊行されたものには次のような例が屢々見出される。

1巻より毎巻12号、23巻1~12(昭18)、24巻1~7(昭19)、25巻1~12(昭23) 以下毎巻12号

この雑誌の所蔵を、23(昭18)—45(昭45)+[欠:24(6)]と報告された場合、24巻の前後が毎巻12号であることを知っていると、つい24 1—5 7—12とやってしまう。これでは実際は刊行されていない8~12号が刊行されたことになり、このような利用者を惑わす誤った情

報を提供するのは、所蔵記入の正確さを生命とする新版編集の基本目的に全く反するものであり、担当者の罪これより大なるはない。

一方、各館に於ける日常業務の激増を考えると、目録の書替えや所蔵巻号の再調査は恐らく至難の業であろう。古い歴史を持ち、明治期からの龐大な資料を抱えている館の原稿の中に、欠号表示による記入が混在するものも或る程度已むを得ないことと思われる。ところで、新版は欧文編にならない所蔵分記入を基本方針として決めている故、欠号表示のままでは原稿として使用し得ず、どうしてもこれを所蔵分表示に変換する必要に迫られる訳であるが、この作業たるや、編集者の責任に於て提出原稿を改変することであり、ここで万が一にも誤りを犯したなら、提出館が原稿提出の為に費された努力とその成果を編集委員自ら蹂躪するに他ならない。従ってこの訂正を行なう際は慎重の上にも慎重を期し、如何なる些細なものでも常に現品確認を徹底的に励行する。即ち編集委員の所属館または関東区内に所蔵があれば、委員自らか或いは所蔵館に依頼して調査確認し、それが不可能な場合は、欠号表示で報告された館に対し遠近を問わず必ず照会し、その回答に従って処理する。(参考資料その他による類推は極力避けること。)

以下特に調査困難と思われる例を幾つか挙げると、

イ. 調査の対象となる巻(以下対象巻と略)の刊行が極めて古いもの。

ロ. 対象巻が終戦前後の数年間に刊行されたもの。

ハ. 対象巻を含み相当長期間に亘って刊行が不定期か刊行頻度が一定でないもの。

ニ. 刊行の事務的な面で、発行者(所)に全幅的信頼を置き難いもの。

これ等の中、所蔵館数が極めて少ないものや、所蔵館は多くても所蔵している期間が各館共極めて短い場合など、類推することすら不可能で、原稿提出館の調査に期待する以外には全く方法がないであろう。

b. 欠あり。各館原稿中「欠あり」と記入して報告された場合の対策

イ. 原稿提出館に正確な所蔵巻号を照会する。

ロ. 照会の結果、調査不可能なことが判明した場合は、次善の策として欠号ある巻を明示して報告され度き旨を重ねて依頼する。

ハ. 前項の「欠号ある巻」を報告された場合、印刷原稿にどのように記入するかについては、種々複雑困難な例が出、最終決定は保留。(この為新版の記入に

若干不統一を生じた。)

(8) 刊年

イ. 日本の年号(天皇暦)を使用する。

ロ. 現品に西暦年のみ記載されているものも日本の年に直す。

ハ. 刊年が2年またはそれ以上にまたがっているものの記入法……種々な場合が考えられる為出来るだけ具体例を示す。

(9) 記入形式上の問題

下記の諸項の処理については総て欧文編にならう。

イ. 地区の間のあけ方。所蔵館数5までは地区の間をあけない。

ロ. 巻号の区別。巻をゴシックにする。

ハ. 巻(回, 集, 輯等も同じ)または号のみのものは巻として扱う。

ニ. 通号から巻, 号(またはその逆)に変わったものは切れ目に;を入れる。

ホ. 完全所蔵の巻から不完全所蔵の巻(またはその逆)に続く場合は完全な巻で一旦切る。

ヘ. ハイフン。2個の連続数の間にも使用する。

ト. コンマ。一切使用せず。

(10) 総目次, 総索引

特別の号として刊行され, 各館原稿の中で報告されている場合でも印刷原稿には記入せず。(旧版と相違)

(2) 相互チェック

印刷原稿の作成が軌道に乗った頃, 編集委員の間で次に行なうべき作業についての意見の交換が重ねられた。印刷原稿を印刷所に送る前に, 慎重なチェックが必要なものは論を俟たない。問題は, 作業開始当時立てられた刊行予定(46年秋の総会までに刊行)が大幅に遅れる恐れの出て来た情勢を踏まえ, 如何に効率的にチェックを行なうかという具体的方法であった。各委員が分担作成した原稿は事務室へ持ち寄る前に内部でチェックしているから, 各委員が自己の作成した分を改めて見直しても余り意味がなく, どうしても違った目で見ることが必要だという点で意見が一致した。次に実行可能な方法が検討されたが, 結局2館ずつ1組となり, 相互に自己の作成した原稿を交換してチェックするという方法をとることになった。これは点検の途中に疑問や不明の点が生じて質問する際相手の質問を受けることが出来, その他の連絡

も含め最も能率的と思われたからである。但し双方の分担が量, 内容(点検の難易)の両面で余り距りがあると, 一方が早く終わってしまうということも予想されるが, 万一そのような事態が起こった場合は随時他を応援する等の方法を講ずることとした。これ等の基本方針は第8回編集委員会(昭46.6.17)に於て決定され, 7月初より各々分担に従って原稿を交換し作業を開始した。

但しひと口に交換と言っても, 今回は各館原稿の他に作成済みの印刷原稿(手書きの為枚数は当初の予想を遙かに上廻った)が加わっている。こうして毎回数個のカード箱(市販の目録カード1,000枚入りのボール箱)にはち切れん許りに詰め込んだ原稿の運搬が繰り返されたのである。都内の比較的近距離の館同志とは言え, 梅雨明けの炎天下, 重い箱を抱えての往復は相当の重労働であった。またこの作業中は連日電話のやりとりが殆んど絶え間なく, これが各館の業務に与えた影響も決して少ないものではなかった。

作業内容としては, 先ず第一に印刷原稿と各館の原稿とを対比して形式的な誤りを発見することであるが, これと共に印刷原稿記入要項(前述の「まとめ」)の各条項の解釈, 適用に誤りや不統一がないかどうかを点検するいわば内面的チェックが重要であり, 作業開始に先立ち委員長よりこの点特に示達された。仍て各館共協力者が第1次チェックを行ないその結果を委員が再チェックするとか, 委員の常時監督の下に行なうとか頗る慎重を期した。また委員の判断で決め兼ねる問題は, 前述の定例参集日に持寄って各委員と協議し委員長の裁断を仰ぐこと, 原稿作成段階に於けると同様であった。

本作業は上記の如く7月初に開始され8月一杯で略々完了した。而して作業の推移に伴い, 前章に於て詳述した数々の問題点——その殆んどははっきりした解決策も具体的措置も見出せぬまま原稿作成作業に入らねばならなかった——が極めて鮮やかに浮彫りされ始めた。勿論作業開始前にある程度覚悟はしていたが, 現実に出て来た原稿を眼前にした時, 各委員はそれ等が予想とは比較にならぬ程重大かつ深刻な困難を伴っていることを改めて痛感させられたのである。以下これ等の問題点の例として, 筆者が作成した委員会討議資料及び委員長に提出したノート(その多くは委員長より各委員に回覧された)中より, 主として「まとめ」に於てとり上げなかった項目を幾つか挙げてみよう。なお委員長を始め各委員からも勿論多数の問題点や貴重な意見が提出されたが, 紙数その他の理由から御紹介出来ないのは誠に遺憾であ

り申訳ない次第であるが、御諒承願い度い。

1) 誌名記入

a. 外来語。誌名が外来語のみから成り且つ現品に仮名(片仮名または平仮名)のみで記載されている場合、現品記載形式の如何に拘らず、語の切れ目を1字あける。

例：ドクター サロン。但し新版98頁のグレンツゲビートは原語が1語であるから、明らかに本細則の誤用の例である。御宥恕を乞う。

なお現品に於て語の間に・のあるものはその通り記入した。

例：ポピュラー・サイエンス

b. 別冊。本誌名とは別に共通のタイトル並びに一連番号を持つもの。この場合、別冊自体独立の逐刊物と認めてよいか微妙なものが多い為、各館の原稿でも様々に扱われている。

例：国民衛生の動向(「厚生指標」の別冊)

決定 本誌と別扱いとし、所蔵は独立誌として報告された分のみを記入。なお「本誌の所蔵については〇〇(本体誌)をも見よ」と注記する。

c. Section, 集, 部等に分れているもの。このうち、新版に収録される Section が1つだけの場合は、原稿の誌名欄に於て、本誌名の次に1字あけて Section の番号及び名称を記入する。(通常の Section 記入法には従わない)

d. 同名誌。誌名記入の上では特に区別しない。(排列は創刊年の古い順とする)

2) 出版事項

a. 発行地。全国的または地域ブロック(数府県連合)の学会や総会の記録に於て、開催地が毎回変わり且つ開催地を発行地としているもの。

決定 「各開催地」と記入する。但し開催地の廻り持ちが判明しているもので、新版に於ける各館の所蔵が総てある一つの回のみである場合も、各開催地とするか、或いはその回の開催地とするか、決定を見るに至らなかった。

b. 発行所

イ. 現品に編集または発行代表者名とその所属のみ記載され発行所の記載がないもの。

決定 所属機関名を発行所として扱う。なお大学の場合は教室まで、官庁は課まで記入する。

ロ. 団体や機関の名称は常に正式な名称を完全に記入する。

例：東大……東京大学または東京帝国大学

ハ. 発行所が外来語のみから成り、且つ現品に仮名(片仮名または平仮名)のみで記載されているもの。

決定 誌名の場合と同様、現品記載形式の如何に拘らず、各語の間を1字あける。

3) 所蔵記入

a. 継続受入誌の最終巻の刊年が昭和46年またはそれ以降にまたがるもの。

決定 刊年の記入は昭和45年までにと定める。たとえば刊行の事実に従って記入すれば5(昭45—46)+または10(昭44—46)+とすべきものを夫々5(昭45)+, 10(昭44—45)+とする。

これは新版が昭和45年12月末日現在となっている故、昭和46年が入るのは不都合ではないかという考えからとられた処置であるが、雑誌目録記入の常識上、巻号のある雑誌に対する記入の中で、巻のみ記入されているものは完結した巻と解されるのが普通であろう。これを上に挙げた例について言えば、前者は昭和45年1年間でまた後者は昭和44~45年の2年間で完結したものととして受取られるであろう。これは明らかに事実を反し利用者を誤らせる記載である。この完結(即ち最終巻の最終号の刊行)が昭和47年、48年と遙か先になる場合、この相違は一層甚だしくなり、たとえば15(昭45—47)或いは20(昭45—48)と記入さるべきものでも総て15(昭45), 20(昭45)としてしまう故、その罪や更に重しと言わねばなるまい。若しあくまでも昭和45年末現在を厳守するならば、このような場合は昭和45年中に刊行された最終号を記入する方法をとり、たとえば上の例では15 1—3(昭45)+或いは20 1—2(昭45)+とするのが最も正確ではないか。事実、記入規則の検討中に委員の間からこの方法を提案されたこともあったが、主として技術的な障害の為採択されるに至らなかった。

要するに、本件については基本原則の線にそい、最新巻を総て完結扱いとし、且つその刊年の記入は現品の刊行状態の如何に拘らず、昭和45年で留めることに最終的決定を見たのである。

(然し上記の如く、これが事実と著しく相違するものとして受取られる例が或いは生ずるかも知れぬ故、御利用の際はこの点特に御留意願い度い。)

b. 発行日不明のもの(n.d.)

年報の如く内容と刊年とが相違している場合、前者を[]後者を()に入れて記入することに要項で決められているが、提出原稿にどちらか一方の記載がなく、

調査しても判明しない場合の処置が、準備期に於て既に問題となっていた。刊年は所蔵の最初と最後の巻にのみ記入され、また新版は多数の館の所蔵が上から下へ並ぶ1館1行方式故、両者の不揃いは特に目立ち易い許りでなく、利用者を惑わす恐れも少なくないという声も出、種々検討されたが結論を得ぬまま印刷原稿の作成に入った。その為各委員は自己の考えに基づいて種々な方法(n. d., ?, ブランクのまま等)で記入せざるを得なかった。(この中では一般の目録規則で用いられている n. d. が多かったように記憶する。)

所が相互チェックに入ってみると、この不統一が予想外に多いことが分り、その対策について再び検討されたが、結局一切の記入を行わず不明の部分はオミットした形をとることに決定した。たとえば最初の所蔵巻の刊年だけ不明の場合の記入は次のようになる。

北海道血液銀行年報 1[昭27]—3[昭39](昭40)

c. 廃刊。廃刊注記を行なった雑誌(凡例7(2)2)参照)に於て最終巻の刊行された号を全部所蔵している場合は完結扱いとする。

d. 内容が華文または韓文のもの。刊年の記入は西暦に統一する。(各国の年号は使用せず)

e. 化学特許総覧。本誌に限り、所蔵は各号に記載されている特許番号を記入する。

f. 完結。不完結の決め方——完結とは何か——

イ. ある巻の通常号の中に含まれながら別頁建てまたは頁付けのないもの。(多くは内容が他の号と著しく性格を異にするもの。)

例：日本歯科医師会雑誌のニュース号

決定 提出原稿の記載通り

ロ. 特別号、臨時号その他。所蔵記入上これ等の取扱いは各館区々。(同じ巻を完結としている原稿の中に、これ等の号を含むものと含まぬものがある。)(凡例参照)

g. 合冊

イ. ある雑誌が第1巻より数巻合併して(合綴ではない)発行されているもの。

例：日本鼻副鼻腔学会誌 1回[昭37]から4回[昭40]までを合併して昭和41年に発行。

決定 1—4[昭37—40](昭41)と記入

ロ. ある巻を発行より数年後に数巻まとめて(合併の形で)再版され、しかも現品に再版の発行日のみ記載されている場合

例：児童研究所紀要

決定 再版された巻の刊年は総て初版のものを記入。

h. 学会(特にその日程の一部である部会、分科会)の議事録に付された第○回の扱い方

小さな学会や研究会或いは大きな学会の部会や分科会等では、必ずしも毎回独自の議事録が出されるとは限らない。前項fで挙げた日本鼻副鼻腔学会会誌のように、数年後に何回分かをまとめて出すのはまだよい方で、大部分の回はその分野の学会の機関誌或いは代表的な商業誌の一部分として(勿論頁も本文と連続)発行し、時たま思い出したように単独で発行するという例も決して稀ではない。

所で会議録の中、独自の巻次を持たず会議の回数のみが記載されているものを逐刊物として扱う場合、所蔵事項に於て回次(回の順序)を表わす数を巻に相当するものとして記入するのが通例となっている。然し巻は刊行の順序に従って連続してつけられるのに対し、回を巻と同様数字で記入すると、前述の如く不規則に発行された場合、回数が飛ぶ為、実際は連続して発行されていても欠巻と同じ形となる。注記に於て第何回は未刊と断れば、このような誤解は勿論避けられるが、極めて特殊な(多くは小規模な)会や昔のもの(日本で言えば明治期)になると、刊行の有無の確認が殆んど不可能な場合が少なくない。これが学会の日程の一部に含まれている部会や分科会の議事録で独自に刊行されたものとなると上記の傾向は一層顕著で、中には日本医学会歯科学分科会会誌の如く、第11回総会(昭17)の時だけ発行されたとされるものすらある。

加之、新版は所蔵記入に於て「回」等の文字を一切使用せず、数字だけで表わす方法をとっている為、上記の誤解を生む危険は特に多いのではないかと懸念が編集委員の間に強く、検討を重ねたが解決策は遂に見出せなかった。

4) 注記

a. 合併。新版では合併を次の2種に分けて処理した。

i. 対等合併

昭18 昭19

A 1—22
B 1—4
C 1—18

D 1—

この場合A, B, Cは夫々合併の時点で廃刊。D誌とは前身誌、後継誌に近い関係となる。

注記 A 昭 19 : B, C と合併 D となる

(B, C も A と同様)

D A, B, C の合併誌

ii. 吸収合併 下記の例は何れも現品記載または絶対確実な根拠ある場合に限り注記する。

イ. 単純な吸収

注記 A 昭 36 : B を合併

B 昭 36 : A に合併

ロ. 吸収と同時に改題したもの

注記 B 昭 36 : C に合併

C 11 (昭 36) : B を合併し 標題誌名となる

b. 休刊

i. ある時点以後刊行を停止したままのもの

下記の理由により原則として休刊の注記は行なわない。

イ. 廃刊との区別が困難

ロ. 刊行停止と見なした時点以後刊行を再開したか否かの確認が困難である。(特に古いものや所蔵館が極めて少ない場合)

以上により i の場合は、刊行停止の時点が比較的新しく且つ確実な根拠のある場合に限り、担当者の判断により注記することを認めるに留めた。

ii. 中間的休刊

イ. 連続してつけられている巻(または年)のある部分が欠番となった場合は必ず注記する。

ロ. 刊行年は飛んでも巻(または年)に欠番を生じない場合は原則として注記せず。

ハ. 但し前項ロに於て刊年の間隔が著しく開く場合(たとえば戦時中休刊となり、戦後相当期間経過してから再刊された場合)、担当者の判断により注記する場合もある。

c. 巻号の呼称の変化

i. 巻→通号

イ. 切り換えられた最初の号に通号のみ記載さ

れているもの

注記 1 (昭 11)—2 (昭 12) : 巻

9 (昭 13)→ : 通号

ロ. 切り換えられた最初の号に巻号を併記しているもの

注記 1 (昭 11) —2 (昭 12) : 巻

3 巻 1 号 (昭 13) : 通号に改称し 9 号となる。

これより後、所蔵中の最終号まで巻号が併記されている場合、注記の最後に(以後巻号併記)と付記する。

ii. 通号→巻

イ. 切り換えられた最初の号に巻号のみ記載されているもの

注記 1 (昭 21)—8 (昭 22) : 通号

3 (昭 23)→ : 巻

ロ. 切り換えられた最初の号に通号を併記しているもの

注記 1 (昭 21)—8 (昭 22) : 通号

9 号 (昭 23) : 巻に改称し 3 巻 1 号となる。

これより後、所蔵中の最終号まで通号が併記されている場合、注記の最後に(以後通号併記)と付記する。

(3) 総合チェック

前章に於て述べた通り、7 月初から開始された相互チェックは、炎暑の中各委員並びに協力者の作業は営々と進められ、略々予定通りの速度で、8 月末から9 月初には完了のメドがついたが、これを以て最終原稿として直ちに印刷所に渡すことに対して、各委員は等しく大きな不安を抱いていた。というのは前章で挙げた問題点の中、最後まで未解決のまま残されたものが少なからずあったからである。保留された問題点には次の如きものが含まれていた。

イ. 全然解決策を見出せず、委員長一任となつたもの

ロ. 各委員の意見が分れ、統一見解に達し得なかったもの

ハ. 作業の終了間際に始めて問題としてとり上げられた為、検討する時間的余裕のなかったもの

而してこれ等に対する各委員の処置は下記の如く区々で、統一を保つことなど到底期待し得べくもなかった。

イ. 記入すべき箇所をブランクにし（即ち何等記入を行なわず）その旨を符箋乃至メモをつけて、次の段階での処置に全面的に委ねたもの。

ロ. 一応記入をした上？をつけるか、欄外に鉛筆書きまたは符箋をつけたもの。

ハ. 自己の信ずる所に従って記入し、格別の注意書きも符箋もつけなかったもの。

繰返し述べた如く、印刷原稿作成要項は最初の「まとめ」が各委員に配付された後、原稿作成及び相互チェックの進捗に伴って行われた夥しい追加変更の結果、複雑多岐を極めた上、各条項間に矛盾を感じる例すら生じ（これが上記の問題点を生んだ大きな原因と考えられるが）、その結果各委員並びに協力者が総ての事項について、その内容を完全に理解し且つ正確に運用し得ると期待することは頗る困難とせざるを得ない状態に立至ったのである。従って相互チェックに於て、たとえ完全に近い程度に迄調整が行なわれたとしても、所詮それはペアとなった2館の間だけのことで、他の組との調整までは手が廻らない。勿論重大な変更については、決定の都度委員長より各委員に通告され、また委員相互間でも気付き次第連絡を怠らぬよう努力はしたが、自館の業務とのかけ持ちということもあり、到底十分には行ない得なかった。特に所蔵記入や注記の形式上の微細な部分になると、電話や手紙では委曲を尽せず、どうしても資料を持寄り顔つき合わせての話し合いが必要となるが、同じ都内にいてもこうした機会は中々得られない。更にこれだけの量になると、同一人の作成した原稿でも、始めの頃のものを終りの方と比べてみると違っているという場合も起こり得る。（これは一般の目録作業に於ても屢々見られる現象であるが。）

以上述べた如き種々の事情から、印刷所に渡す前に最終段階として総合的なチェックが絶対に必要であるとの意見が期せずして各委員の間から起こり、8月24日の第9回委員会に於て、相互チェック終了後引続き総合チェックを行ない、これが済み次第逐次印刷所に渡すこと並びに作業項目及び各項目の分担が決定された。作業項目と各項目の分担は次の通りである。

1. 排列	東大, 昭和
2. 参照	東女, 慈恵
3. 欧文誌	慈恵, 東女
4. 注記及びその他の記入	慶応
5. 華文及び韓文誌	慈恵

なお印刷原稿作成作業の開始に先立ち、各委員は自己の分担した各館原稿中、収録を疑問とするもののリストを作成し、委員会に於て審議の結果非収録誌を一応決定した。然しこの中には境界線上のものが少なからず、再検討を必要とすることに意見の一致を見たが、これについては全委員が当ることになった。

かくして総合チェックは9月初から開始された。既にこの頃には相互チェックの終わった印刷原稿が編集事務室に勢揃いして居り、総ての作業は同室内で行なわれた。

少々枝葉にわたるが、本段階の作業を説明する必要上当時の状況を略述すると、これ等は東京医大より編集用として貸与された木製のカードケースの抽斗に各首字ごとに分けて納められ、総計20数個の抽斗が室の中央の机の上に置かれた。また各館から提出された原稿は、これ迄通りボール紙のカード箱に入れ、事務室の壁側（本会中央事務局との仕切り）の机上に並べられた。この両者共室外持出し厳禁を委員長より示達され、各委員も互いにこの遵守を申合せた。改めて言うまでもなく、本段階の作業は各項目ごとにAからZまで一貫して行なうことに最大の意義があるのであるが、この方法では作業中何時どの部分と関連を生じ、どの部分のカードを見る必要が起こるか全く予想がつかず、従って各館原稿、印刷原稿共に1枚残らず事務室内の所定の位置に常時存在することが絶対必要だったからである。

作業は概ね前章で述べた相互チェックに於ける問題点就中未解決或いは疑問を残した点に特に重きを置いて行なわれた。従って大きな項目としては、総合チェックの為に新しく附け加えられたものはなかった。（作業の途中で新たに生じた細かな問題は勿論多かったが。）なおこの時期に欧文誌の問題が並行的に起こり、これが作業の手順及び予定に相当の影響を与えた。（欧文誌については後章に譲る。）

総合チェックは各委員の分担が異なる為、作業の内容や方法も当然異なる。それ故、本来ならば各委員の作業経過、問題点、感想等を集めて列挙すべきであるが、その余裕がなく、ここに御披露出来ないのは誠に残念である。読者に対し、また各委員に対しこの点お詫び申し上げますと共に、これ等多数の貴重な経験や意見を死蔵せず、

今後の我が国に於ける雑誌総合目録編集事業に貢献し得るよう、何等かの形で発表されんことを切望し已てまい。

筆者の分担した注記及びその他の記入事項では、凡例でも強調されている新版の最大使命即ち所蔵記入の正確さに最重点を置いた。(従って注記のチェックも所蔵に関係するものを特に注意した積りである。)所蔵記入については形式の統一と並んで、各担当者が各館提出原稿の記載内容をどのように読み、どのように判断したかを、特に誤りを犯し易い事例(その中には原稿提出館自身が勘違い乃至混同されているものも少なくない)について検討した。而してこの検討の為には各館原稿と印刷原稿との対比(これは言い換えれば相互チェックのやり直しである)を必要とすることも屢々あった。更にこの対比の結果重大な誤りが発見された場合は、印刷原稿の広範囲な加筆訂正はおろか、数十枚に及ぶカードの新規作製の強行を余儀なくされたことも二、三に留まらず、これが筆者の分担の完了を著しく遅らせ、委員長を始め各委員の作業に影響を与え、新版刊行の遅延に拍車をかけるに至ったことは深く反省している。然し筆者としては、新版刊行後各館の閲覧業務担当者を誤らせ、利用者に迷惑を及ぼす可能性を予知しつつ看過することはどうしても出来なかったのである。以下本段階の作業中、筆者が特に注意を払った点を幾つか挙げてみよう。

1) 大学の教室論文集や業績集で、大学の名称と所蔵の刊年とが矛盾するもの。たとえば旧官立医科大学は戦後総て総合大学の医学部となったが、この名称変更は概ね昭和24~25年に行なわれた。出版物の場合は、内容の年代のズレや所謂2枚看板時代の長短等から、大学により多少の異同はあるが、どんなに遅れても昭和30年代に入ることはない。従って〇〇医科大学△△教室業績集という誌名の原稿に於て、所蔵の中に昭和30年以降のものが含まれていれば、明らかに誤りと断じ得る。特に巻(または号)がついて1(昭31—33)などと記入されていたら、全然別の雑誌ととり違えられている疑いが濃厚である。(この逆の例即ち戦後の名称の下に戦前の刊年のものが含まれている場合も勿論あった。)

2) 学会特に地方会の会誌(または会報)

学会特にその地方会の会誌等の中には、改題の経緯が複雑なものや改題の時期等の確認の困難なものが少なくない。各館原稿の中でも戦前と戦後が混同されているのに、印刷原稿作成者がそれに気付かず、提出原稿に記載されている通りに記入した例が幾つか発見された。

1例を挙げると、日本婦人科学会は昭和24年に現在の日本産科婦人科学会と改称され、これに伴って各地方会も大凡この時点で改称されているが、各館の原稿中に地方会誌の名称と刊年が一致しないものが幾つかあった。

3) 復刊と同時に巻次が更新されたもの。各館原稿中、復刊前の分と復刊後の分を混同している例がある。中には下記のような甚だしいものも見られた。

5(昭28)—9 11—14(昭17)

4) 医科系大学機関誌の各巻の完結

前項に於て述べた如く、所蔵記入に於て号数のついてる巻は不完結を、また号数のついていない巻は完結を意味することは雑誌目録の常識である故、ある巻の実際に刊行された総ての号を記入することは明らかに記入上の誤りである許りでなく、この巻を完結としている(即ち号数を記入していない)館はそれ以上の号を持っているという誤解を利用者に与える危険が十分予想される。(たとえば某誌のある巻の18巻が5号で完結であるのに18 1—5と記入した館が1館でもあると、単に18とだけ記入している館は6号或いはそれ以上所蔵していると考えられるのは当然であろう。)それ故このような誤った記入(完結を不完結としているもの)を出来るだけ発見し訂正しなければならず、その為には少なくとも問題となりそうな巻の刊行号数を知ることが必要となるが、特に1巻の号数が相当期間一定して刊行されていたものが、或る年(または数年間)だけ変化して刊行された場合など、この変化を正確に把握して記録することは必ずしも容易ではない。然し終始一貫して不規則なものを除き、ある程度の期間安定した規則的刊行を続けて来た雑誌の刊行状況に突然乱れが起こり、その結果各巻の最終号数に異同を生じた例を数多く見て行くと、そこに自づと幾つかのパターンが浮び上り、それによって或る程度見当をつけられる例も少なくない。(尤も多数の雑誌の中からこれ等のパターンの何れかに該当するものを拾い出すには、若干の経験とカンを必要とする場合があるかも知れないが。)以下このパターンについて述べる。

イ. 創刊時の巻。これは特に暦年の途中で創刊された商業誌に多く見られる。たとえば或る年の9月に創刊された月刊誌(年1巻)では、第1巻だけ4号で第2巻以降は毎巻12号となるが、この場合1 1—4と記入した例が多い。

ロ. 終戦前後の数年間に刊行された分

ハ. 掲載論文数の一時的な激増の為、1巻の通常刊行

号数に変化を来たしたもの。(この最も典型的な例として、旧学位令廃止直前の各大学機関誌及び一部の学会誌が挙げられる。)

ニ. 1巻の刊行サイクルを会計年度(4月より翌年3月まで)から暦年(1月~12月)に変更の際、前者の最終の巻の号数に変化を生ずる。たとえば創刊以来会計年度に合せて刊行されて来た月刊誌が25巻から暦年制に変わった場合、24巻のみ9号で完結となる。(これは特に学会誌に多い。)

このような点に着目しながらチェックして行くと、完結している巻を不完結としているものや、刊行されていない号を刊行されたものとして所蔵を報告しているもの(たとえば上記イの例を11—4、ニの例を241—9としたり、また逆に11—24—12とか241—57—12としているもの)が意外に多く、且つこれが相互チェックでも屢々見落されている。[(1)BⅢ(7)a欠号表示原稿の書替え参照]

然し全収録誌についてこのような点を一々確かめることは、不可能とは言わぬまでも相当の期間を要し、新版編集作業の過程に於て実行の極めて困難なことは明らかであろう。そこで筆者は、各大学(医科系)を代表する機関誌及び古い伝統を持つ極めて少数の学会誌に限り、注記、所蔵記入の両面にわたり重点的にチェックを行なった。このように対象誌を選択したのは下記の理由によるものである。

イ. 大学機関誌は概ね刊行が定期的で、変化の見られるのは殆んど上記の場合故、チェックの際比較的まとをしぼり易い。

ロ. 新版は加盟各館の所蔵記録を根拠としている故、新版の記入は各館の目録の反映と見做され、従って新版の内容の良否はそのまま各館の業務の評価、各館の信用につながる。就中大学機関誌の場合、その大学の図書館の記録が最も信頼度が高いとされる故、ここで大きな誤りが生ずれば、当該館は鼎の軽重を問われよう。

ハ. 幸いに医科系大学機関誌については、既に本会が「国内医学雑誌逐号刊行年譜」(昭36)を作成、各誌の巻号と刊年の関係を明らかにして居り、このような確実な資料は他種の雑誌には到底望み得ない。(一言付け加えるが、この「年譜」は第31回総会(東医、昭35)に於て大阪地区が提案し且つ編さんの任に当り、翌昭和36年刊行されたものであるが、新版編集作業中「年譜」の恩恵を受けた例は枚挙に遑がない。同地区の先見の明に改めて敬意を表する次第である。)

5) 各加盟館の所属する大学その他の機関に係る特殊且つ貴重な逐刊物。これは前項とは逆に極めて特殊な主題、領域に関する調査報告類が主で、中には殆んど所蔵報告のないものもあるが、少なくともその存在が明らかになっているものについて、その所蔵を出来るだけ追求し周知することも、この種の目録の大きな使命であるとの確信からチェックを行なった。

たとえば某大学の東南アジア医学研究会調査団報告書というのが二、三の館から報告されたが、何れも部分的な所蔵で且つ地域的にも北と南にかけ離れている。しかも肝心の某大学からは全然報告がない。然し本家本元故恐らく完全に所蔵されている筈と思い照会した所、案の定報告もれであった。

このように提出原稿の範囲からはみ出すことは、編集上明らかに行過ぎであり、そんな余計なことをしているから益々遅くなるのだとお叱りを受けるかも知れない。その点は重々覚悟しているが、前記の如く、減多にない学術的資料が日本中の何処か1カ所にでも完備していることを突きとめるのは、多少の遅延を補って余りあるものと筆者は今でも確信している。ここで一言。上記の例の如く、自館の所属する機関に係る重要な学術資料の報告もれば、業務上遺憾と思われる点であり、今後かかるケースの絶滅を切望して已まない。

(4) 国内欧文雑誌

新版に相当数の国内欧文雑誌(以下欧文誌と略)が収録されていることは、最初に一見して気付かれたことと思う。その大部分は欧文編への参照であるが、邦文誌とは全く同一扱いのもの(出版事項、注記、所蔵事項等の記入の揃ったもの)も若干含まれている。これ等欧文誌の取扱い方については、凡例の中で稍詳しく述べているが、和文編という名称に反し多数の欧文誌を収録した事情については凡例の中でも「種々の事情により」と述べているだけなので、ここで一言説明しておき度い。

抑々欧文編、和文編という名称は各々に収録されている雑誌の内容(論文その他)に使用されている言語による区別である。この方針に従って、欧文編は外国、日本を問わず欧文で書かれている雑誌を収録している故、和文編は邦文誌のみを収録し国内欧文誌を対象外とすることには、準備作業開始当初は全く問題がないと考えられていた。所が旧版及び「現行」70年版収録誌から誌名のマスターカードを作製する作業が進むにつれて次第に疑問が生じ、更に欧文編に収録されている欧文誌をチェックするに及び、到底看過し得ない重大問題として各委員

に認識され始めた。かくして第 2 回委員会 (45. 11. 19) 以来毎回検討を重ねたが、容易に結論を得るに至らなかった。このように最後まで難航した理由としては、問題の根源が欧文誌の刊行面の多様性と変化の激しさにある点を挙げられるのではないかと考えられる。(欧文編の凡例中の収録範囲の項には「ただし内容が欧文、和文混合のものは除外した」とあるが、実際はこれで片附く程簡単だとは到底思われない。)

欧文誌の中には邦文誌との区別がつけ難く、現品を手にとって見ても、これを欧文誌とすべきか邦文誌とすべきか判断に迷うものが少なくない。況んや現品の表紙或いは誌名リストだけを見て決めるのは大間違いの因となる。以下その例を挙げてみよう。

1. 各号の内容が欧文邦文相半ばし、何れが主とも決め兼ねるもの

2. 各巻に含まれる号の中、大部分は邦文記事のみであるが、特定の或いは少数の号は全号欧文で書かれているもの (またはその逆)

3. 年報や要覧等で、ある年は欧文邦文別々、或る年は欧文または邦文の何れか一方のみ、また別の年は両者混合という具合で一定しないもの

4. 創刊以来邦文誌であったものが或る年から欧文誌に変わったもの (またはその逆)

5. 各号の内容の主題分野或いは編集担当部局により使用される言語が異なるもの。(たとえば人文・社会科学系のものは邦文、自然科学系のものは欧文と略々決っているもの。比較的規模の小さい総合大学、女子大学、家政大学、短期大学等の紀要や研究報告の類に屢々見られる)

6. 誌名のみ欧文で内容は全部邦文のもの。

これ等の例は 6 以外誌名も欧文邦文双方でつけられているものが多く、更に現品に於ける誌名の記載の仕方も内容に合わせて変えているものが少なくない。(内容が欧文の場合は誌名も欧文のみを記載するか、或いは欧文誌名を大きく出し、邦文の場合はその逆にする。)

このように雑誌現品自体が複雑不統一を極めて居り、従って図書館に於ける処理方式がまちまちになるのも蓋し曰むを得ない所と言うべきではなからうか。今回各館から提出された原稿に上記の事情が如何に反映していたかは、凡例の中で挙げた幾つかの例から御想像頂き度い。編集委員会に於てもこの問題を重視し、数次にわたり慎重な検討を行なったが、これら各種各様の原稿を一つの方針で統一的に処理することは到底不可能であると

の結論を得たに留まり、結局凡例所載の如き中途半端な方針に落着かざるを得なかった次第である。然しそれだけに、この方針は実際原稿作成作業に入ると忽ち各所で矛盾を露呈し、原稿作成者を立往生させる事態が続出した。就中凡例 8 (1) b 2) イの場合は特に疑問が大きかった。即ち欧文編に報告し今回未報告館の所蔵については、欧文編の所蔵内容をそのまま転記する方法をとったが、欧文編は昭和 42 年 9 月 1 日現在で新版 (昭 45. 12. 31 現在) より 3 年半近くも前のものである故、その間に各館の所蔵内容に変化が生じていないとは断言出来ないという意見が編集委員の間でも強かった。にも拘らず欧文編の所蔵を機械的に転記するという些か乱暴な方針を敢えてとらざるを得なかったのは、主として、上記に該当する欧文誌の所蔵を欧文編に報告された各館に照会し、追加原稿の形で提出方を要請しても、回答の出揃うのを待って印刷原稿に繰込むのは、当初の刊行スケジュールを大幅に変更しない以上不可能なことが明らかになった為である。

また次の (1) b 2) ロの中「今回の報告が欧文編と著しく相違しているもの」は原則として今回の報告に従ったが、上記の如く欧文邦文の区別が困難である上、両者別個に且つ極めて接近した巻数がつけられている場合などは、各館原稿中の巻数が果して何れを指しているのか疑問を感ずる例も若干存在した。勿論このような場合は、提出館に照会するよう努力したが、中には照会もれがあったのではないかと懸念している。

更に、「現行」、文部省編学術雑誌総合目録或いは各館の所蔵目録等により、ある雑誌が相当長期間にわたって所蔵されていることが略々確実と思われるにも拘らず、欧文編にも新版にも全く報告のない例が幾つか見出されたが、これ等はイの場合と同様の理由から当該館に照会する余裕がなく、殆んど総て見送らざるを得なかった。

以上述べた如く、国内欧文雑誌には問題点が多く、従って新版に収録されたものの中、特にその所蔵記入に関しては誤脱が少なくないのではないかと懸念する次第であるが、利用の際は他の目録就中欧文編、過去数年間の「現行」、文部省編学術雑誌総合目録自然科学欧文編、各館の所蔵目録等を併せて参照されるようお願いする。

(5) 送稿と校正

欧文編並びに新版の編集期間 (編集委員会の発足より刊行まで) の中、印刷原稿作成 (チェックを含む) と校正との占める割合は下表の通りである。

	編集期間	印刷原稿作成 並びにチェック	校 正	頁 数
欧文編	2年4月 (昭42.6 ~44.10)	1年1月 (昭43.2 ~44.2)	3月 (昭44.6 ~8)	B5版 1,303頁
和文編	1年9月 (昭45.10 ~47.6)	9月 (昭46.4 ~12)	*5月 (昭47.1 ~5)	B5版 753頁

* 部分的には昭和46年11月中旬より始められていた故、実際の所要期間は6ヶ月以上である。

これで見ると、和文編は欧文編の60%弱の量の校正に2倍の期間を要したことが分る。校正の難易や速度が必ずしも常に原稿の量と比例するものでないことは勿論であるが、それにしても和文編の校正の所要時間は明らかに過大と言えるであろう。そこでこの校正の遅れと送稿方法並びに最終原稿の形式との関係について若干の考察を行なってみたい。今後雑誌総合目録や各館の所蔵雑誌目録を編さんされる際、幾何の御参考になる点があれば幸いである。

a. 印刷所に渡すまで

1) 送稿の方法——一括分割か——

前述の如く、印刷原稿は全委員分担の総合チェック終了により、漸く印刷所に引渡されることとなった。前章に於て述べた通り、第9回編集委員会に於て総合チェックを10月下旬までに完了し、印刷所に渡すことを決定した。この時点では勿論印刷原稿を全部揃った形で1度に渡す一括送稿の方法をとる積りであったが、その後下記の如き事情により当初の方針を変更し、分割送稿するの已むなきに至った。その理由は

イ. 総合チェックは各委員が分担して行なったが、その進捗度は委員の分担した項目、特にチェックすべき事項の量及び難易に大きく影響され、完了予定日に相当の開きを生ずるに至り、その結果、全項目のチェックが完了するのを待って一括送稿した場合、刊行の著しい遅延は不可避であると判断されたこと。

ロ. 印刷所より、原稿に於ける誌名の首字の幾つかをまとめて1人の写植工に受持たせる方針で準備している故、送稿は一括でなくてもよいとの意向が伝えられたこと。

このような事情から分割送稿に変更されたのであるが、この方法では送稿が開始された後、残された部分をチェックしようとしても、既に1部の原稿は手元にない為、完全な総合チェックは事実上不可能となり、後日校正の作業中、原稿から直して行かねばならぬような重大な誤りや不統一が幾つか発見されるに至った。

2) 原稿の形式——カードかシートか——

欧文編の編集委員がその報告の中で強調された通り、印刷原稿は、作成から最初の排列位まではカードの方が有利な点が多いが、それ以後の段階になると、カードは一覧性がない為、排列、チェック、校正等多くの点で不利であり、シートとする方が望ましい。新版に於ても最終原稿のシート化について再三検討されたが、経費その他の理由から見送りとなり、結局カードのまま送稿する方法をとることに決った。従って編集から校正までの全段階を通して、カードを相手の作業が最後まで続けられたのであるが、これが作業の各段階に及ぼした影響は予想以上に深刻であった。

カード形式目録の一覧性欠除に起因する障害は極めて多く、真に枚挙に遑がない。新版の編集作業の中から例を挙げると、チェックの途中で或る雑誌の中の事項の処理に疑問を生じ、原稿作成要項を見ても解決策を見出せない場合、これと同じ事項を含んでいる他の雑誌の記入を見て、それと調整統一を図りながら記入するのが最良の方法と思われるが、後者の例を偶々記憶しているか或いは前者と極めて近接して排列されている雑誌の中から見出し得る場合を除き、通常は印刷原稿全体の中から探し出さなければならない。然し問題が起こる度毎に大量のカード(新版の場合最終原稿は総数約19,000枚)を1枚1枚めくって適当な例を見つけることは殆んど不可能である故、上記の如き疑問が生じた場合は、?をつけただけで処理を保留するか、他の同様な例に対する記入との不統一を生ずる危険を冒して処理する他ない。何れにせよ、これ等は後日に於ける再度の訂正につながるものである。

またシートのように一覧性があれば、ばらばらとめくっている中、それまで意識しなかった問題点とか、予想外の誤りや不統一を発見する場合が少なくないが、カードではこのようなことは恐らく僥倖に近いといってもよいのではなからうか。

b. 校正——特にこの段階に於ける原稿の訂正——

上記両項の結論は何れも校正の段階に於ける原稿の訂正を示唆している。総合チェックが進むにつれ、各委員もやがて否応なしに直面させられる問題として考えざるを得なくなった。そこで校正開始に先立って開かれた編集委員会に於てこの問題をとり上げ、種々検討の結果、校正に入ってから原稿訂正は印刷のルールに反する上、印刷所の作業を混乱させ、ひいては新版の刊行計画に齟齬を来す故、このようなことは極力避け、万已む

むを得ずと思われるものは委員長の裁断により決めることを申合せた。所がいざ蓋をあけて見ると「万已むを得ざる」ものが踵を接して出現し、各委員はその処理に頗る苦慮した。然し結局原稿不訂正の線は大幅な後退を余儀なくされ、原稿の訂正が随所で行なわれ始め、中には校正刷の 1 頁全面にわたって訂正という極端な例すら現われるに至ったのである。

要之、校正就中初校の段階における大量の原稿訂正は、印刷原稿の作り直しにも等しい結果となった。換言すれば、この時期に至って始めて最終原稿が確定したのである。本章の冒頭に於て、新版の校正所要時間が欧文編に比べ過大であると述べたが、実は新版の校正は通常の意味での校正ではなく、原稿の作り直しが殊に初校の所要期間の大きな部分を占めていたのであった。(この現象は部分的には再校更に 3 校にまで及んだ。) 勿論原稿に手を加える必要のないものについては通常の校正のみが行なわれた故、この期間各委員並びに協力者は校正と原稿再製の両作業を平行して行なった訳であるが、年余に及ぶ編集作業の最終段階に於て起こった新たな事態は、それが事実上自己の労苦の跡を自らの手で消し去ることになる場合が少なくない為、深い挫折感を伴い勝ちで、その処理は必ずしも容易ではなかった。

本章に於て述べたことは、総て編集計画並びに作業上の不手際に基づく問題であり、この処理が新版刊行の遅延に拍車をかけたことは否定し得ない事実であろう。筆者は編集委員の 1 人として衷心遺憾の意を表すると共に、忌憚なき御批判を賜り度くお願いする。

唯筆者はここで一言事実を指摘することをお許し頂き度いと思う。即ち新版の編集作業は常に期限と経費という越え難い二つの断崖の谷間を歩き続けたこと、並びに信頼し得るツールは皆無に近く、更にタイプライターすら使えぬ文字通り 100 パーセント手作業という条件の下に行なわれた事実である。

次の版からは機械編集実施が略々確実と言われているが、如何に新鋭の機器を駆使し、潤沢な編集経費を投入されようとも、特に和文雑誌については、我々が負わねばならなかった基本的条件の幾つかは依然として残るのである。編集の基本計画立案に当られる方々は勿論、刊行に協力し、且つその成果を利用される会員各位に於かれても、これ等の点に深く思いを致されんことを切望して已まない。

終りに

以上新版(医学雑誌総合目録と文編第 5 版)の編集経過を実務の面から概観した。本来ならば各編集委員と共同乃至分担して報告すべき所であるが、委員会の決定により筆者に一任された為、単独で報告することとなった。然し重要な事項については脱漏、説明不足、論旨不明或いは不徹底のものが多い半面、枝葉の事項に関する記述は屢々冗漫に流れ、また記載の重複や矛盾更には筆者の記憶違いや独断による事実誤認も少なくないであろう。これ等本稿の不備欠陥は総て筆者 1 人の責任である故、ここに会員各位に対し罪を謝すると共に、菅委員長以下編集委員諸氏に申訳なく存ずる次第である。但しここで一言弁解することを許されるならば、本稿は筆者がこれまで経験した中で最も書きにくいものの一つであった。次にその事情を述べてみたい。

第一に、本会の代表的な継続事業の一つとしての新版の編集作業の報告を本会の機関誌に掲載する以上、その内容の記述は出来るだけ事実に基づいた客観的な正確さを旨とすべきは勿論であるが、さりとて業務日誌や決算報告のように無味乾燥では、多くの読者に関心を持って読まれることを期待するのは困難であろう。

第二に、この種の業務は実際に経験しなければ理解し難いことが極めて多い。これを裏返せば、経験のない人に理解して貰えるように書くのは極めて困難だということになる。経験の有無が理解にどれ程影響するかは、本稿の中で屢々引用した欧文編の編集経過についての編集委員の座談会記事がその好例として挙げられるであろう。この記事は新版編集計画立案に最も参考とすべき重要文献として我々委員も夙に期待して居り、編集業務開始に先立ち、委員長より各委員に対し熟読検討するよう特に指示された程であった。然し正直の所、当時の筆者の読後感は「びんと来ない」の一語に尽きた。(他の委員の感想も略々同様であったと記憶する。) 所が編集を終った今日読み返してみても、その 1 字 1 字が痛切に響いて来るのには全く驚かされた次第である。本稿も恐らく読者に十分理解して頂けない点が少なくないことと思われるが、これ等の点については筆者または新版の編集委員(欧文編関係は欧文編の編集委員)に対し忌憚なき御意見、御質問をお寄せ頂き度い。

第三に、本稿執筆中、重要な事項であることを知りつつ、故らに説明を省いたり簡略にしたり、或いは表現に手加減を加えざるを得ない場合が少なくなかった。これ

等については「種々な事情により」と言うだけで、それ以上は御賢察を願う他はない。これは本誌の如き公開一次資料で且つ本会の機関誌という性格を持つ雑誌に掲載される記事に負わされた宿命的なものであろうか。

なお、将来、雑誌総合目録或いは各館単独の雑誌目録編集に従事される方から、業務の必要上本稿の記事について詳細を知り度いという希望を寄せられた場合は、差支えない範囲内で出来るだけお答えする積りである。

最後に、機械編集との関連について一言つけ加えておき度い。新版は編集方針の根底に、次版の機械編集への橋渡しの役割りを強く意識した。新版の姉妹編であり且つ既に刊行されている欧文編が上記の方針を打出している故、新版がこれにならったのは当然というべきであろう。にも拘らず新版の編集計画に於ては、辛うじて中途半端に片足を踏出した程度に留まり、その結果利用上不便を来す場合は欧文編より寧ろ多いのではないかと懸念している。

何分邦文雑誌総合目録の機械編集は未だその例がなく、本会の事業計画に於てもアウトラインすら示されていない段階にある為、新版編集に際しても、欧文編の方針の中で機械編集に関係のありそうな部分をマークするのが精一杯で、邦文誌の持つ特異性を追求し、機械編集との関連を検討する余裕など全くなかった。こういう状態故、編集作業に入ってから旧態依然たるオール人力作業の繰返しで、原稿カードを書いたり現品をチェックしたりしながら「こう言うのが機械編集の際問題になるのではないか」という文字通りの問題意識が、時折り頭の隅の方をかすめる程度に過ぎなかった。このようにして、新版の編集過程を通じ、機械編集に貢献すべき何物をも得られなかったことは誠に遺憾である。然し新版編集関係書類及び原稿は相当期間（恐らく次版編集まで）保管されることが決まっている上、各編集委員も夫々作業中の記録や資料を保存している筈である故、これ等を検討すれば多少は手がかりが得られるかも知れない。なお筆者の許にも相当量たまっているが、目下整理中なので、他日この整理の結果を何等かの形にまとめて次版編集の際の御参考に供し度いと考えている。

新版は医学雑誌総合目録（以下総目と略）の歴史の中で、人力のみにより編集された最後の版となるであろう。40年前に初版が刊行されて以来続けられて来た人力編集はここに終りを告げ、次版からは電算機を中心とした機械編集に移行することは略々決定的と思われる。而してこの移行の結果、総目の内容はもとより利用面にも

大きな変化が起こることは当然予想される所であろう。然し表面上の変化が如何に大きくとも、それによって総目の本質まで変化することはあり得ないし、また絶対にあってはならない。

改めて言うまでもないが、総目の本質は総目が本会加盟館の緊密な協力によってのみ作り出され、且つその声価を高めて来たという点にある。従って総目は全加盟館の共有財産と見做し得るであろう。些か鼻につくと言われるかも知れぬが、それは加盟館による、加盟館の為の、加盟館のものである。それ故総目をどのように作り、どのように使うかは、加盟館の総意によって決められた方針にのみ従うべきであり、本会以外の如何なる方面からの制約乃至掣肘も受けてはならない。若しこの制約や掣肘が機械編集に対する協力乃至提携（特に電算機使用の面に於ける）の代償或いは交換条件として要求される場合は、寧ろ機械編集計画を延期または一時棚上げし、人力による補遺版編集等の便法により一時を凌いだ上で徐ろに後図を策するのが至当と考えられる。（外部の有益な助言や建設的な批判を、本会が自主的に判断してとり入れるのは上記の制約等とは勿論全然別問題で、この方は常時大いに努力すべきことである。）

結論として次のことが言えるであろう。即ち総目編集に於ては、編集業務全般を通じての本会の主体性の確保が大前提であると同時に最高の基本的要件として、本会執行部や編集関係者は寸時も忘れてはならず、また全加盟館はこの基本線が総目編集開始時より刊行まで忠実に守られるよう、厳重な監視を怠ってはならない。何となれば、万一この線が崩れ主体性を失った暁には、その影響の及ぶ所、暫に総目編集に留まらず、遂には本会の総ての活動は最早加盟館の総意を結集し得ず、従ってそれ等は加盟館の要求に合致せぬまま終ることは火を賭るより瞭かであるからである。而して、ひと度このような状態に陥れば、本会の伝統として創立以来守り続けられ、数々の輝かしい業績を生み出す原動力となって来た相互協力の精神は重大な脅威にさらされ、ひいては本会の存続すら危くする事態にまで発展する可能性を果して何人が否定し得るであろうか。次版編集計画立案の際は、執行部並びに編集関係者に於て上記の点を特に慎重に検討されるよう切望して已まない。

結 び

昭和45年10月編集委員会発足以来1年9ヶ月、新版は加盟各館の協力と編集関係者の努力によってここに漸

く刊行の運びとなり、加盟館各位に利用して頂く日を迎えた。願みれば長く険しい旅路であった。本稿執筆中も過ぎし日々とその間に起こった数々の出来事が走馬燈の如く脳裏を去来する。現在の心境はと問われても、月並極まる形容であるが、感慨無量の4字のみ。他に言うべき言葉を知らない。所で肝心の出来栄えのことを考えると、呑気に感慨にふけてなどいられない。筆者の机上に置かれた新版の真新しい頁をあちこち繰る度に、目の中に飛び込んで来るのは、所蔵記入の不統一や疑問点或いは調査未了のまま見送らざるを得なかった誌名や注記等に於ける問題点許りである。このような不備欠陥がこれから先、次版刊行までの何年かの間、全国の加盟館及び相当数の非会員館に於て、利用者各位並びに閲覧係（就中相互貸借担当）の諸氏にどれ程御迷惑をかけることであろうか。編集者——特に最終段階に於て総合的な点検と調整を担当した——の1人として誠に命の縮まる思いの続く毎日である。

然し兎にも角にも新版は生まれてしまった。無責任極まる言い草とお叱りを受けるかも知れぬが、出来の悪い子ほど不憫なる親心を以て新版を使って頂き度くお願い申上げる。

筆を擱くに当り坂本会長、萩谷事務局長を始め本会執行部諸公の御指導、加盟館（の中でも逐刊物担当の諸氏）の御協力に対し、また特に新版の先達として有形無形の御指導を賜った欧文編編集委員の方々に衷心感謝の意を表し度い。

末筆ながら、東京医大大久保分館に於かれては、年余に亘り編集事務室用として多くのスペース並びに資料を提供され、剩え編集作業の全期間を通じ筆舌に尽せぬ御協力を頂いたことを御報告し、併せて同館員諸兄姉に厚く御礼申上げて本稿の結びとする。

（附）邦文誌の特異性

以下述べることは雑誌総合目録の編集作業に直接関係を持つものではなく、寧ろその基本的背景に属するものと考えられる。またこれ等の特異性を生むに至った原因や事情は極めて複雑であり、その多くは日本の社会、医学界、医療制度等に深く根ざしている。従ってその各々について詳論することは到底不可能と思われる故、ここでは単に実例を挙げるだけか、または極めて簡略な説明を附するに留める。

1. 日本語

（1）読み方

人文、社会科学関係のように字がむずかしくて読めないという例は比較的少なく、どう読むのが正確かを決め兼ねるのが大部分である。雑誌名は1種の固有名詞であるから、編集者や発行所が決めた読み方が現品に記載してあれば、それが正式な読み方として認められる。従って辞典や人名事典、分県地図等を調べて、これはこう読むのが正しい筈だといくら力んでも無駄である。それ故現品記載の読み方（仮名、ローマ字等による）を確認することが先決であるが、非営利出版物ではこの記載を欠く例が少なくない。このような例では発行所がどう決めたか、始めから全然決めなかったか分らず、その為屢々厄介なことになる。新版編集作業中で目についたものを挙げると

a. どのようにでも読めるもの。

〔例〕：歯歯

b. 固有名詞に由来した語が入っている場合、その語が固有名詞の正式な読み方通りでよいかどうか疑問なもの。

〔例〕北海道帝国大学薬局藻岩会会報 藻岩は地名としては moiwa であるが、会名の方は sōgankai という読み方も考えられる。

昭和医科大学白馬診療部業績集 hakuba か shi-rouma かは、昭和医大で当時正式にどう読んだかによって決まる。

男也会会報 男也は戦前東北帝国大学教授（病理学）であった木村男也博士の名に因んだもので、読み方は onari である。然し会の名称は dan'yakai であったかも知れない。事実当時学内では一般に dan'ya で通っていた。

c. 日本語の発音自体が一定していないもの。

〔例〕一高志林 今日正式には（と言っても一高は存在しない故、何所で誰が決めたのか不明であるが）ichikō と呼ばれているようであるが、嘗ては（特に東京では）屢々 ikkō と呼ばれた。

河本博士眼科研究会雑誌 博士は hakase か hakushi か。今日でも両方通用している。

（2）漢字

現品記載の如何に拘らず、原則として当用漢字に統一することに決めたが、矢張り例外を認めざるを得ない場合が出て来る。

〔例〕臨牀 最初は全部臨床に直す方針であったが、その後総て現品記載に従うことに変更された。

之 たたとえば杏林之栗、日本眼科之証明など。

現品記載に従い、「之」を使用する。

(3) 片仮名 これも現品記載に従う。

〔例〕 慢性伝染病ニ因ル死亡統計

(4) 外来語

Isotope News 発音に従えばアイソトープの次に入るが、字に従えばIの部に入る。

(5) 発音上は全く同一であるが、現品に記載された文字が異なり、内容も全く別なもの。

〔例〕 各務研究報告(岐阜農林専門学校報告の旧誌名)
Kagami Kenkyu Hokoku(邦文誌名:各務研究報告)

2. 刊行上の問題

(1) 巻号のつけ方

a. 明らかに不統一、混乱或いは誤りがあると思われるもの。

〔例1〕 日本原子力研究所保健物理安全管理部の活動
JAERI レポート番号のつけ方が不統一。

〔例2〕 日本原子力研究所年報 途中まで JAERI レポート番号の7,000台がつけられているが現在は番号なし。

〔例3〕 農林水産統計報告 農林水産統計資料に含まれ、且つ両者夫々一連番号を持つ。しかもこれは農林栄養統計とも関係がある。

〔例4〕 石川県歯科医師会会報 再三休刊し、復刊の際1巻から始めているもの。

1(昭12)—8(昭17); 11(昭19); 11(昭21)

〔例5〕 北海道産科婦人科学会雑誌 15 1—2(昭40)にて休刊。16(昭45)復刊。この復刊の辞に、15 3—4 刊行未定、考慮中とあり。

〔例6〕 保険医学雑誌 同じ年に同じ巻が2回出され、しかも「巻」という語の内容を異にするもの。

60 1(昭37); 60(昭37)

巻号時代の最後 これより年1巻

〔例7〕 臨牀日本医学 原著版 原著版独自の号数は毎号の表紙にのみ記載されて居り、従って製本の際各号の表紙が除かれると、後になって号を調べることが出来ない。(毎号の初頁には本体の巻号が記載されているが、原著号の発行が極めて不規則な為、本体の巻号は原著号の号数を調べる際全く参考にならない。)

〔例8〕 児童研究所紀要 逐刊物には珍らしい合綴再刊の例。1(大7)—5(大10)を合綴して大正11年に再刊。この現品の標題紙、奥付等には再刊の発行年月日のみ記載。この為新版の各館提出原稿中、初刊所蔵館と

再刊所蔵館の1~4巻の発行年が異って報告された。このような場合、再刊の刊年を機械的に初刊に直してよいのか。少なくとも再刊であることを示す必要があるのではないかという意見も出たが、結局両者を全然区別しないことになった。

〔例9〕 中村淹時報 昭和4年創刊以来、年-月号で表記されて来たが、昭和13年8月に巻号制に改められ3巻8号となった。然し何故3巻と決めたのかその理由は何所にも記載がなく不明である。

b. 規則性はあるが分りにくく記入上困難を感じるもの。

1) 或る号の内容が通常号の内容と著しく異なる為、頁建てその他で別扱いとし、号だけを続けているもの。たとえば団体の機関誌の中には、或る号の内容が全部ニュースの場合、この号だけ頁建てを別に行っているものがあるが、この種の雑誌を、頁を続けるという方針を忠実に守って製本すると上記の号は当然抜けてしまう。このような製本雑誌の各巻に含まれている号を調べて記録して行くと、欠号がある為、号を基準とすれば不完結となるが、頁を基準として考えれば一応完結と言えぬこともない。(特にその巻の索引に上記の特別扱いの号が含まれていない場合。)

〔例〕 日本歯科医師会雑誌

これとよく似た例として学会機関誌の総会号が挙げられるであろう。(後述)何れにせよこれ等の例は、逐次刊行物の或る巻が完結しているとは如何なる状態を指すものと解釈すべきであるかという基本的な課題を含み、その解明を迫っているように思われる。

2) 第何年という形で表記されているもの。この「年」は殆んどの場合、その雑誌が創刊されて以来の通算年であるが、この記載に関して特に次のような例が注目された。

イ. 誌名変更と同時に巻次を更新した場合(即ち新誌名のものが第1巻から始まる場合)、旧新両者は夫々前身誌、後継誌の関係になる訳であるが、この中、前身誌に併記されていた「第何年」が数字諸共後継誌に引継がれているものがある。

ロ. 年巻併記のものが数年休刊後復刊した際、巻は休刊直前の巻に続けるが、年は創刊から起算して(即ち休刊中の年も加算して)記載している例がある。(この巻と年の相違が休刊の事実を確認する極め手となったこともあった。)

3) 昭和○年△月号という形式のもの。原稿の

中で、この月を数字で記入しただけで「月」であることの説明がないと号と見なされ、月刊誌以外では甚だしい混乱乃至誤謬を惹起する。

4) 通号から巻号（またはその逆）へ変更した後も従来の通号（または巻号）を併記しているもの。各館の扱い方が区々で、その処理上困難を感じた例が少なくなかった。

(2) 分離、統合の経過や事情が複雑なもの。

大学や官庁（特に出先機関）の刊行物で Section に分れているものに屢々見られる。

〔例〕愛媛大学紀要、武庫川女子大学紀要、農林省農業技術研究所報告等。

(3) 発行地の変遷が複雑なもの。

比較的小規模な研究団体の機関誌で、編集の中心人物の勤務先の変化に伴って、その勤務先に置かれた機関誌の編集・発行所も転々と移動した例がある。

〔例〕脈管生理学論文集 呉 東京慈恵会脈管学研究所。

(4) 付属的に刊行されるもの。

この例としては特別号、臨時号、増刊号、別刊号、別冊、付録等が挙げられるであろう。これ等の中には、刊行が定期的なものと不定期なもの、頁建てが本文と連続するものと独立のもの、その他種々な変異があり、これ等を一つのルールで処理することは困難な場合が多い。

(5) 学会関係の記事を集めて学会誌の一部として刊行するもの。（総会号、学会号、総(学)会講演要旨等）

これ等も、通常号と全然別個のもの、号のみ通常号と連続するが別頁建てのもの、号頁共に通常号に続くもの等多種多様で、また同一誌でも所蔵館により扱い方が異なる場合が少なくない。

(6) 編集・発行上の特殊な事情に因る混乱。

a. 編集陣（または発行所）内のトラブルを窺わせるもの。

〔例〕「臨牀」と「診療」 新版 p. 614 参照。

中京歯科評論 大正 12 年に日本の口腔衛生と改題したが、大正 14 年に中京歯科評論（再生）として復刊。後者の通号は改題直前のものを継承。

b. 他誌との合併の際のトラブルを窺わせるもの。

〔例〕細菌学雑誌 新版 p. 555 参照

(7) 戦時中の特例。

a. 戦時中の国策に基づく強制的合併。

この例は極めて多く、その全貌は恐らく今日まで明らかにされていないものと思われる。他日本会の事業として大々的な調査が行なわれるならば、本邦医学雑誌の史的研究の面のみならず、医学書誌の編さんや戦時中の医学文献の利用に対し裨益する所少なからぬものと確信する次第である。

次に最も顕著な例の一つを挙げてみよう。昭和 19 年夏、福岡医学雑誌、医学研究、熊本医学会雑誌、九大医報、長崎医学会雑誌、至誠の 6 誌（A B C 順）は実地医家と臨牀に統合され、後者はこの時「臨牀ト研究」と改題した。（巻次は実地医家と臨牀を継承）然し翌 20 年終戦となり、出版事情に好転の兆が見えるや、統合された各誌は一斉に分離の動きを始め、昭和 22 年より 24 年にかけて次々に復刊したのである。（但し至誠のみ詳細不明。御教示頂ければ幸甚。）

b. 甲号、乙号

用紙不足の対策として、昭和 19 年の半ば頃より代表的な学会機関誌に限って実施されたものである。即ち毎号を甲、乙に分け、甲号は抄録、論文要旨等を内容とし、従来の配付先（図書館を含む）に送られ、一方乙号は原著論文や特別研究の全文を掲載し、各大学の教室、主任研究者等極めて限られた範囲にのみ配付されたのである。

因みに、この両号の刊行頻度や頁付け等は各誌区々で、中には戦後暫く経ってから遡って発行されたものもある。以上述べた所から明らかなように、今日各館に所蔵されているのは大部分甲号で、乙号の所蔵されている例は極めて稀と思われる。従ってこの方式により発行された学会誌の総てについて、甲乙共に完備している館は恐らく皆無と言ってもよいのではないであろうか。

この甲号乙号については今日まで殆んど記述がなく、図書館員すら気付いた人は少ないようで、今回各館から提出された原稿中にもこの点を明示された館は二、三に過ぎなかった。（この件に関し数館に照会した所、総て甲号のみであることが判明した。）然しこれは本邦科学文献刊行史上重要な出来事である許りでなく、文献利用上からも、正確なデータを把握することは我々の責務ではなからうか。医学中央雑誌第 90 巻の刊行経緯と共に、本会の手では是非早急に調査に着手されるよう切望して已まぬものである。

（昭和 47 年 9 月 13 日受付）

コンピューターと医学雑誌総合目録

高橋 伸 夫*

早晩、医学雑誌総合目録の編纂事業がコンピューター・システムにのるのは必至である。欧文第5版の序にこういう意味のことが書いてあります。

今回の和文第5版の編集に、微力ながら参加させていただき、マスター・カードのチェック、加盟館からの原稿カードを比較調整しながら印刷用原稿カードに転記、いろいろこまかな事柄の照会、ゲラ校正等、一連の編集過程作業をまのあたりにし、勤務先の東大医学図書館の電算機システムを連想しながら、この目録作業をコンピューターのシステムに移行する方法や可能性をしらずしらず想像してしまうことがしばしばでした。

編集作業も最終のラウンドを迎えたある日、委員長から、この目録作業を機械化の視点から書いてみてはとすすめられ、浅い経験と未熟な知識をかえりみず、次のような仮空のシステムを紙の上に作ってみることにしました。

まずシステム作りの第1歩として、どんなコンピューターを使うのが問題になります。使用する機種を選択は予算の面での制約を受け易く、その決定は多分に、運命的な要素に左右されやすいことはいなめません。

当システムを考えるうえでは、機器本体の記憶容量はもちろん大きいのにこしたことはありませんが、それよりも、どんな入出力用装置が付属しているかがポイントになります。

雑誌名や各加盟館の所蔵レコードなど、目録に記載される項目は、かなりの量にのぼることが予想されますので、それらを一括して記録できる装置が必要です。それは、やはり、磁気テープやディスクの装置ということになります。しかもこの付属装置の数が多ければ多いだ

け、データーの一括処理ができるので便利です。

付属装置の一つ、ライン・プリンターにどのような種類の活字がそなわっているかも重要な要素で、それが、誌名の表記法に直接関係してきます。当システムで作られるファイル群は、マスター・ファイルとして、次の編集委員会に引き継がれ、目録作業に活用されます。そしてそれがこのシステムの唯一の利点である省力化の方向を決定づけるのです。

そのためには、これらファイル群の維持が、大切になります。また、せっかく保存してきたファイル群が、いざ使用する段になり、適用する機種がちがって互換性がなくなり使えなくなってしまうのは困ります。そこで、同じ種類のモデルが一貫して使用できるように、配慮することが肝要です。

いったん、磁気テープやディスクに出力した記録は、その内容に変更がない限り、長期間正確なデーターとして利用できます。

したがって、2回目以後の編集委員会の仕事は、前の委員会から引き継いだマスター・ファイル群をインプットして、各加盟館の所蔵記録をアウトプットし、それを送付して記載事項の異動を記入してもらい、内容に変化のある部分だけの修正データーを作り、ファイルを更新すればよいということになります。

更新の対象になるデーター量の多寡が、結局、機械化のメリットを占う分岐点になりそうです。その点で、目録刊行のサイクルは、その間隔が短かければ、更新用データーの量もそれだけ少なくなることが期待できるというわけです。毎年発行される「現行医学雑誌所在目録」を、この総合目録用のファイルを利用して作成するのも一つの方法でしょう。

* Nobuo TAKAHASHI, 東京大学医学図書館

この方法によれば、誌名、誌歴、参照等の項目は、毎年 update されることになり、能率的です。

つぎに、目録に記載される項目と、それらを入出力する際の問題点を考えてみることにいたします。誌名の記入については、欧文編および和文編第 5 版の最新誌名の下に所蔵を集中して記録する方式よりも、それぞれの誌名の下に記載する IFLA 方式が好都合です。後者の方法によれば、誌歴は前後関係を記述すればすみますから、ファイルを更新する効率は、前者よりすぐれています。

つぎに、和文、露文、華韓文の誌名表記が問題になります。

一般に、ライン・プリンターには、ロシア文字や漢字の活字はそなわっておりません。

ローマナイズするとか、ほん字をするとかして、入力の方法を講ずる工夫が必要です。

出版事項は、欧文誌と和文誌の場合とでその記載の項目に違いがあります。

前者は発行所を記載しておりませんが、後者には、その記載があります。

マスター・ファイルは、和・洋それぞれ別のファイルを作成することになりましょうが、プログラムは、両者兼用となりますから、ファイルは別でも、フォームは同一の方が良い事になります。

目録に記載されるのは、次の 7 項目で各項目のレコー

第 1 図

ド・サイズを東大の例を参考に、記しておきます。

- 1 雑誌名 (144 文字)
- 2 発行地 (20 字)
- 3 発行所
- 4 注記 (144 字)
- 5 所蔵館名
- 6 所蔵
- 7 継続・廃刊・受入中止記号 (1 字)

上の項目を、当システムでは、次のように 3 つのファイルに分割して記録することいたします。

1. 誌名ファイル (MASTER-1) — 誌名コード
誌名
発行地
発行所
2. 誌歴・参照ファイル (MASTER-2)
— 誌名コード
参照
誌歴
3. 所蔵ファイル
— 誌名コード
所蔵館名コード
所蔵
継続・中止・廃刊印

これら 3 ファイルの結合により、総合目録をアウトプットするのが、当システムの最終目標です。

ファイル相互間を連結させる鍵となるのが、誌名コードで、連結用として使用する外に、配列を無視して入力したレコードを、ソートのプログラムで配列し直す際のキイになったり、ファイルの記録内容を修正する際のマッチのキイになったりで、重要な役割を果します。

誌名コードの体系としては、数字のみ、英数字混合、英字のみの 3 種が考えられますが、要は、新規タイトルの割込に充分に応えられる余裕があれば、あとは使い易さを考慮するだけで足りると思います。

所蔵ファイルを排列したりあるいは修正したりする時の鍵として、誌名コードの他に、もう一つ所蔵館名コードが必要です。

誌名コードを作成するのと同じ考慮をはらって作れば充分でしょう。

機械化のための第 1 回編集委員会に課せられる仕事——誌名、誌歴・参照、所蔵の 3 ファイル作成——を考えてみることにいたします。

- (1) 医学雑誌総合目録第 5 版と現行医学雑誌所在目

録から、収録が予想される誌名をデーターシートに転記。

それをカードにせん孔し入力用データーにする。

(第1図)

- (2) せん孔済のカードを、誌名の排列規則により、ハンド・ソートいたします。

それをインプットし、各タイトルに誌名コードを与え、コードと誌名の対照表をファイルに出力します。(第2図)

- (3) コードと誌名が記録されているファイルから、誌名以外のアイテム(発行地、発行所、誌歴、参照)を記入するためのデーター・シートを出力します。それに、アイテムを記入し、カードにせん孔します。(第2図)

- (4) 誌名以外の項目をパンチしてあるカードと、コードと誌名の対照ファイルをインプットします。

そして、誌名と発行地と発行所を一方のファイルに出力し、誌歴・参照を他方にアウトプットします。

前者が MASTER-1 後者が MASTER-2 となります。(第3図)

上の(2)と(3)の間および(4)のあとには、ファイルをアウトプットすると同時にライン・プリンターに、ブルーフ・リストをプリントさせます。それにより

誤字やパンチ・ミス等のチェックをし、修正すべき個所があれば、データーを作り、エラー・リカヴァリー・ルーチンを通すという仕事が、含まれます。

- (5) (1)~(4)で作成した誌名ファイルと誌歴・参照ファイルを入力します。そして、各加盟館に送付し、所蔵を記入して貰うためのデーター・シートを出力します。(第4図)

所蔵の記載法については、欧文編・和文編第5版が採用している表示法を受けつぐことにいたします。一応、巻号の記載法を、1N1-3(1910)/2-11/12N5/17-21(1972) + という具合に表示することに決めておきます。

号の表示は、小さな活字が使用できませんので、頭にNを添えて表わします。

また、所蔵途中での巻の表示には、頭に/を添えて表現します。

- (6) 所蔵が記入されたデーター・シートが、編集委員会に返送されてまいります。

このデーター・シートを、すぐに、カード化します。

カードになった所蔵データーは、ただちに、インプットされて、ファイルに記録され、同時にチェック用のブルーフ・リストを出力します。

このファイルを、すでに出力されていた他の所蔵ファイルとマージします。このステップをくり返え

第2図

第3図

すことにより、全加盟館からの所蔵が出揃うことになります。(第5図)

目録に記録される各加盟館からの所蔵は、原則として、各館が報告してくる表示をそのまま出力いたします。ただし、同一誌名の下での各館の表示に食い違いが

第4図

第5図

ある時は、統一をとるために、委員が adaptation を行います。

所蔵ファイルのフォーマットは、ライン・プリンターにプリントされる時の一行分に当る字数を1レコードにしておく、あとの更新が比較的楽にできると思います。

(7) (1):(6)で作られた、誌名ファイル、誌歴・参照・ファイル、所蔵ファイルを入力し、医学雑誌総合目録を出力します。(第6図)

2回目以後の編集委員会に課せられる仕事——誌名ファイル、誌歴ファイル、所蔵ファイルのアップデイトーを考えてみることにいたします。

(1) 前会から引き継いだファイル群をインプットし、各加盟館毎の所蔵目録を出力いたします。

これを、各加盟館に発送し、記載事項の変動を記入後返送して貰います。(第7図)

(2) 返送されたデータ・シートから、異動項目の部分をデータ化します。(第8図)

(3) 修正用データと、修正内容により、3つのファイルからひとつづつファイルを選択して、入力し、内容を更新します。更新後、医学雑誌総合目録を出力します。(第8図)

以上で、この稚拙なシステムの概略を述べおわったわけですが、機械化により、この目録作業にどのような思恵がもたらされるのかを考えてみましょう。

まず、第一回の編集委員会が行う仕事は、従前の手作業で行なう仕事と同等か、あるいはむしろより以上の労

第6図

力が要求されそうです。

手作業で編集を行なう場合は、編集の方針を検討する時、若干、未検討の部分が存在したり、あるいは一度決

第 7 図

第 8 図

められた事項でも、実際の編集段階に入ってから、ケース・バイ・ケースで方針を変更することが、比較的容易です。

また、実際に、編集にたずさわってみますと、雑誌というものの性質がまことに多種多様で、機械により一律に処理してしまうには、余りにも厄介な一面をもっていることを痛感します。

誌歴の問題然り。巻内号数の問題、亦、然り。掘りだしたら、つぎることのない程の執拗な性質をもっています。

このような変化に則応させることを、機械化システムで考慮しますと、はなはだしく効率に悪影響をおよぼします。

そこで、手作業でならば許されるキメの細かさを、ある程度、犠牲にしないと効率の良いシステムを作り出すことはできないかもしれません。

一度決められた方針はできるだけ変更しないという立前にしなければならないと思います。

第 2 回目以後の編集委員会の仕事は、既成のファイルを修正することが中心になります。

したがって、問題は更新の対象となるデータ量ということになりましょう。

継続して受入れられているものは、終巻終号の表示を修正すればよいことになります。

いままで欠号であったものが補充されたり、逆に所蔵していたものが行方不明になったりして、変更すべきアイテムが多いとたいへんですが、これは多くないことが期待できます。

また、新規のタイトルがどの位発生するかが問題になります。

とにかく、第 1 回の編集作業に比較し、かなりの省力化の実が挙がることを期待できると思います。

(昭和 47 年 7 月 6 日受付)

*

*

*